
h.o's.O.way

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

h・o・s・o・way

【Nコード】

N5977P

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

——その世界では、魔力を持つ者は永きを生きていた。

『伝説』と呼ばれる朱髪黒瞳の裏魔術師ラジア・ゼルダと、そんな彼女に育てられた銀髪蒼瞳の魔力を持たない美麗青年剣士リザ・レストル。

二人の紡ぐ壮大な純愛ファンタジー開幕！

只今、途中割り込みで『Extra Chapter1 / With
hof Gloden』を投稿中。

完結次第、『Chapter 4』を再開します。

登場人物一覧（前書き）

登場順に記載。

また、極力気をつけてはいますが、多少のネタバレを含むので注意。
順次追加予定。

登場人物一覧

【ラジア・ゼルダ】

性別 / 女

年齢 / 不詳。外見年齢は22歳程度

容姿 / 朱髪黒瞳

職種 / 裏魔術師

『生ける伝説』『最強』などの異名を持つ裏魔術師。

高難易度の転移術を呪文詠唱なしで施行可能。

賭け事とお金に目がなく大食い。

地名や場所を覚える気が全くなく、気配にも疎い。

【リザ・レストル】

性別 / 男

年齢 / 24

容姿 / 銀髪蒼瞳

職種 / 剣士兼傭兵

幼少期ラジアに拾われて以来、現在まで共に旅をする美青年。

魔力はなく普通の人間だが、五感においては並の人間より優秀。

戦闘技術から賭け事まで、大抵のことはラジアに仕込まれている。

【ルシア・アズガルド】

性別 / 男

年齢 / 不詳。外見年齢は20代後半

容姿 / 黒髪朱瞳

職種／ラグト国上級貴族兼ラグト国ハシルス王城最上級専属魔術師

変態に近い嗜好を持ついろいろと歪んだ美麗紳士。

基本的に物腰は優雅で柔らかい。

【ミレンツィア・ドリス】

性別／女

年齢／『Wicth of Gloden』時で18歳

容姿／茶髪に翡翠色の瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師、後に第一王女アリア・リタリナ・ラグトリア付き魔術師となる。

基本的に高圧的な態度の魔術師。

一見して美少女。

【ビーチエ・カザリ】

性別／女

年齢／不詳

容姿／不明

職種／占い師

ラグト国の東側に位置するワーカー街に一見寂れた店を構える。常に店内は暗く、基本的に知人友人相手にしか占いをしない。消費型魔術師のため、外見は老婆であり、フードを被っている。

【アリア・リタリナ・ラグトリア】

性別／女

年齢 / 17

容姿 / 金髪紫瞳

職種 / ラグト国第一王女

歌うことが好きなラグト国の姫君。

【ロイズ・フェアニー】

性別 / 男

年齢 / 『Witch of Gloden』時で57歳
ブラチナフロンド

容姿 / 白金髪に同色の瞳

職種 / ラグト国ハシルス王城専属魔術師兼ミレンツィア付き専属副官

穏やかな気性のミレンツィアの部下。

『儚げな美少年』と謳われるほどの容姿を持つ。

緩くウェーブしたショートボブがチャームポイント。

【ディノ・ブランゼス】

性別 / 男

年齢 / 不詳。外見は壮年。

容姿 / アッシュグレーに白髪混じりの短髪にアッシュグレーの瞳

職種 / ラグト国ハシルス王城専属魔術師総括

ラグト国における魔術師の実質的なトップ。

豪快で思慮深い。

【ゾルゲ・ヴァイヴァリー】

性別 / 男

年齢／不詳

容姿／黒髪黒瞳

職種／ラグト国ハシルス王城専属魔術師

軍人の方が向いていそうな規格外の体躯と粗野で大雑把な性格をしているが、人望は厚い。

【カウゼ・ララウ】

性別／女

年齢／不詳。外見年齢は20代中盤程度

容姿／黒髪灰瞳

職種／情報屋

魔力を持つ情報屋でリウゼの双子の姉。

エルリッツ小国リーツアイの街の南に位置するテテの森に事務所兼自宅を構える。

いつもポニーテールにしている。
騒がしい。

【リウゼ・ララウ】

性別／男

年齢／不詳。外見年齢は20代中盤程度

容姿／黒髪灰瞳

職種／賞金稼ぎ

魔力を持つ賞金稼ぎでカウゼの双子の弟。
カウゼと共にテテの森に住む。

割りともな思考回路の持ち主。

Opening I have one's own way

とある世界、ここは魔力を持つ者が存在し、彼らはその力故に永き時を生きていた。

そこに、その強大な魔力故『伝説』と呼ばれる裏魔術師がいた。

彼女の名はラジア・ゼルダ。

朱き長髪を靡かせ、黒き夜色の瞳を持ち、その名を裏社会のみならず知らしめる彼女は、二つ名に違わず最強に等しかった。

孤高の彼女はいつしか、とあるきっかけにより少年を拾う。

彼の名は、リザ・レストル。

朱き月の如き彼女の色に反して、彼は優しく輝く月の如き銀色の髪と、深い海の如き蒼の瞳を持っていた。

そうして時は流れ、いつまでも若さを失わない彼女を追い越すように、少年は青年へと成長した。

その歳、二十四歳。

彼女の外見年齢は、出会った頃の二十二歳程度から変わらぬままで、そうしていつしか、彼は願うようになっていた。

——いつまでも傍に。

そうしていつしか、彼女は願うようになっていた。

——どうかしあわせに。

彼女は言う、いつまでも変わらぬその姿で。

「あたしは夢を叶えない。貴方がそれを望んでも」

O p e n i n g I h a v e o n e · s o w n w a y (後書き)

have one's own way (ハブ ワンス オウン
ウェイ) / (和訳) 好き勝手に生きる

1 | 1 sideラジア

寂れた酒場。

薄汚れたランプ。

木製のテーブルも大分くたびれており、カードを取ろうとしたら、少し引つ掛かった。

くわえ煙草で五枚のカードを眺めて、あたしは密かにほくそ笑む。

「いいか？」

「いつでも」

目の前で同じく五枚のカードを眺めるオヤジの言葉に答える。
オヤジの喉元がごくりと鳴るのを見届けて、行く末を確信した。

「ええいつ、ままよ！ツーパー！」

ぱんつとカードを卓上に叩き付け、オヤジはあたしの顔を見た。

ふん、甘いな。

「ロイヤルストレートフラッシュ」

ゆっくりと手元のカードを裏返して見せて。

がつくりと肩を落としたオヤジに、笑みを浮かべた。

「じゃ、そーゆーことで。これは貰って行くからね」

煙草を灰皿に捻付け、卓上の小袋を手取る。

持ち上げるとじゃらっという音と、心地良い重量感。
気分いい、最っ高。

あたしは満面の笑みで、立ち上がった。

「姉ちゃん、俺らを五人抜きとはかなりやるな。何者だ？」

肩を落としたまま、オヤジがあたしを見上げる。

「別に。ただの旅人」

短く答える。

まあ、間違っではないない。

「また来るか？」

「気が向いたらね」

オヤジはにやつと笑った。

どうやら気に入られたらしい。
もう一回位、来てやってもいいか。

あたしはそんなことを考えて、寂れた酒場を後にした。

外に出れば、もう日はとっぷり暮れていた。

手に持った小袋に目をやってから、高く昇った月を見上げる。
朱い月。

あたしの髪と、同じ色。

少し睨んで、溜め息混じりに歩き出した。

「染めようかな……」

「何で？」

独り言に返事があつて、見知った気配にようやく気づく。
見れば、いつの間にか隣にいる青年。

「……リザか。相変わらず気配を消すのが上手いな」

こいつはリザ、リザ・レストル。

銀髪蒼瞳の美青年……に育った。

まあ、綺麗になるだろうと踏んで、あたしが育てただけど。
あたしの観察眼は確かなものだった。

「ねえねえ、何で染めようと思ったの？」

隣に並んで首を傾げる。

あたしを覗き込む様に。

見事な銀髪が、月の光を含んでさらつと揺れた。

「今日は娼館に行けって言わなかった？その分の金、渡した筈だ
けど」

さり気なく話を変えて、リザに一瞥くれる。

「貰ったけど行かなかった。だって俺、ラジアちゃんといたいもん」
「健全じゃないな。溜まるじゃない」

リザとはずっと一緒に旅をしている。
育てていたから、当たり前ではあるけれど。

彼が十五歳になった頃から、定期的に娼館に通わせている。
男だからというのもあったが、それは主に、あたしが一人になりた
い時だった。

「俺はラジアちゃんとやりたい」

端正な顔が嬉しそうに歪められ、嬉しくないことを言った。

「駄目」

あっさりと拒否して、そのまま歩を進める。

リザとそういった行為をしたことがないわけではない。

何度か金がなく、何度か一緒に寝て、その時、何度かやった。

男だから溜まっているのだろうと思って相手をしていた。

何度かしてわかった。

リザがあたしに触れる時、そこに愛情がある。

それは、まずい。

愛情のあるそういった行為をあたしはしない。

ある時から、そう決めている。

「ラジアちゃんが嫌ならしない。けど、今日は一緒に寝てもいい？」

あたしは溜め息をついた。

駄目と言っても、リザは間違いなくベッドに潜り込んで来るだろう。

宿部屋は一つしか取っていない。

娼館に行かせたので、安心していた。

まさか、戻って来るとは。考えていなかった。

「……朱い月の夜は駄目だっって言っただけだ」

一応、遠い昔に言いつけたことを持ち出してみる。

「髪、染めるとか言うからだよ」

「それが何」

「今日は一緒に寝る。嬉しいなー」

投げ掛けた言葉はあっさりと遮られ、会話にはならなかった。
溜め息をついて、朱い月を見上げる。

こんな夜は、やり切れない気持ちになるのだ。

リザは知らない。

何故あたしが朱い月を嫌うのか。

知るはずがない。

言っていないのだから。

理由は、遠い昔。

遠過ぎて、もう届かない昔。

普段は気にもならない自分の朱い髪色が、こんな夜は嫌になる。

また溜め息が出そうになり、それを飲み込む。

そんなことは、無意味なのだ。

「……特別だからね」

その言葉に、リザはまた、嬉しそうに笑った。

「染めなくていいよ」

「何で？」

「俺は好きだから」

あたしは答えなかった。

代わりに、その蒼い瞳に視線を投げれば、当たり前のようにそれが交わって弓なりに細められる。

いつからリザは、こんな瞳であたしを見るようになったのだろう。

熱を含んだ、愛しい者へと向ける瞳。

あたしはそれに応えることは出来ない。

永い時を生きる。

あたしの中の強大な魔力が、普通の人のような時間の歩み方を許さない。

永い、永い、それこそ、いつ果てるかもしれない命を。

「あんたを拾ったのは、間違いだったかな」

呟いて、一度伏せてからその目を逸らす。

リザは何も言わずに、ただ、笑っていた。

何はともあれ、今夜は一緒に寝るのだろう。

りざの中でそう決まってしまうたらしいし、それにわざわざ、今更
どうこう言つのも面倒くさい。

「……いつまで……、」

「え？」

「……何でもない」

わかつているのに知らない振りをして、曖昧に、あやふやにして。

「行くか」

朱い月の下、あたし達は宿屋へと足を進めた。

1 | 2 s i d e リ ザ

今夜はラジアちゃんと寝る。

俺はそれがすごく嬉しい。

ラジアちゃんは迷惑そうだった。

知っている、そんなことは知っているけれど。

ラジアちゃんは俺を想っていない。

思っているのだろうけれど。

それも、知っている。

知っているけれど、止められないんだ。

嫌がることはしない。

して欲しいと望むことは何でもしてあげる。

だから。

ずっと、永遠に傍にいさせて欲しい。

ごろごろとベッドの上を転がりながら、横目でラジアちゃんを見た。
さつきから後ろ頭しか見ていない。

煙草をふかして、ただ、月を見上げている。

いや、多分、睨んでいる。

彼女に関して、俺の勘が外れたことはない。

朱い月の夜は一人にしろ。

拾われた時、一番始めに言われたことだった。

最初は守っていたけれど、最近は守っていない。

いつも娼館に行く振りをして、部屋の外で待っている。

ドアが開いたことは、一度もない。
仕方がない、俺は気紛れに拾われただけなのだから。

「ラジアちゃん」

名前を呼んでみる。

寝返りを打てば、安いベッドが軽く軋んだ。

「ラジアちゃん」

もう一度呼んでみる。

振り向かないどころか、微動だにもしない。

「ラジアちゃ……」

「うるさい」

振り向かないまま、不機嫌な声が返って来た。

ああ、どうしよう。

嬉しい。

それだけで、ものすごく嬉しかった。

俺はきつと今、ものすごく笑顔だと思う。

煙草の白い煙がゆらつと揺れた。

ラジアちゃんが溜め息を吐いたんだろう。

そんなことでさえ嬉しく感じる。

自分のことで、彼女が溜め息を吐く。

そんなことで、どうしようもないほど、笑顔になるんだ。

俺は多分、病気だ。

それは多分、と言うか絶対、ラジアちゃんにしか治せない。

ラジアちゃんは知っている。

けれど、治すつもりはないんだろう。

だから永遠に治らないけれど。

「いいんだ」

それでも。

小さく呟いた。

「何が」

朱い髪が軽く揺れ、その夜色の瞳が俺を映した。

どうしよう。

すごく嬉しい。

俺は思わず、目を細めた。

煙草を捻消して、ラジアちゃんは立ち上がるとベッドに腰掛ける。

白く華奢なその指が、俺の頭を撫でて。

ただただ、どうしようもないほどの気持ちだが、それに煽られた。

やばい。

非常にやばい。

やりたい。

こんなことで、簡単に俺の体は反応する。
けれど、しない。

約束をしたのだから。

ラジアちゃんに擦り寄って、目を閉じる。

「風呂に入って来るから。先に寝てな」

「……うん」

優しく俺に言って、ラジアちゃんは立ち上がった。

その綺麗な指が、あっけなくするりと頭から離れて行く。

寂しい、だなんて言えないままに。

ぱたんとドアの閉まる音に、俺は小さく溜め息を零した。

少し重たい瞼を開けて、そのままの体勢で窓に視線を投げる。

俺よりも長い時間、ラジアちゃんを奪っていた朱い月が、皮肉なほどに綺麗に見えた。

「何で」

何で。

「俺じゃないの？」

何で。

わかるはずはない。

きっとそれは、俺の知らない過去だから。

俺の時間は限られている。

残念だけれど、今のところは限られている。

この世界で魔力を持つ者は三割程度で、どちらかと言えば珍しい部類の人間だ。

その枠に、俺は入っていなかった。

ただそれだけなのに。

灰皿には、中途半端に消された煙草があった。

手に取って眺めてみる。

くわえた部分には、軽く齒型が付いていた。

「……あーやばいなあ」

口にくわえて火を点ける。
そんなことで、欲情した。

ありえないけれど、それは紛れもない事実。
寝転がったまま、煙草をふかす。

焦がれて、焦がれて、どうしようもなくて。

体に疼いた欲を紛らわすように、白い煙が、薄汚れた天井へと消えて行った。

暫くして、ラジアちゃんが戻って来た。

「まだ寝てなかったの？」

少し驚いて俺を見つめる。

「待ってたの」

「うんって言ってたじゃん」

「そうだけど、待ってたんだ」

ふうんと小さく零して、ラジアちゃんはベッドに腰掛けた。
俺はいそいそと起き上がる。

手荒く髪を拭く彼女から布巾を取り上げて、まだ濡れたその朱を丁寧に拭いた。

「綺麗だよ」

「リザの銀髪の方が綺麗だよ」

その一言は、狡かった。

気付けば押し倒していた。

体力だけなら、俺の方が上。

魔力を使われたら吹っ飛ばされるけれど。

実際、何度か吹っ飛ばされたけれど。

水を僅かに含んだ朱は深紅となって、安いベッドに散らばった。

「してもいい？」

「約束は？」

「……しても、いい？」

ラジアちゃんは何も言わなかった。

ただ、俺を見つめていた。

表情一つ変えることなく、ただ、見つめていた。

それがひどく、切なく胸を抉る。

胸元をはだけさせ、その白い肌に吸いついて、きつく、朱い花を咲かせて見せる。

駄目だ。

ごめん。

ごめんなさい。

三つ程咲かせて、俺は隣に寝転んだ。

「……ごめんね」

ここまでして謝るなんて、どれだけ俺は狡いんだろう。

「やっぱり娼館に行けばよかったじゃない」
「……大好き」

ここまでしてそんな言葉を口にして、どれだけ俺は卑怯なんだろう。
だけど、それでも。

「……知ってるよ」

ラジアちゃんは俺を抱き締めたまま、小さくそう口にした。
その感触は柔くて、抱き締める力も柔くて。
していないのに、何だか満足した。

今は届かないけれど、いつか届く日が来るのだろうか。
来ないまま俺は消えるかもしれないけれど、傍にいていいだろうか。
俺の夢をラジアちゃんは叶えてくれるだろうか。

今は、どちらでもいい。
抱き締め返したら、ラジアちゃんが笑った気がした。
それがまたものすごく嬉しかったから、ラジアちゃんの胸に顔を埋

めて、俺は擦り寄る様にして目を閉じた。

それでも、ねえラジアちゃん。

やっぱり、きつとずっと、貴女しか見えないんだ。

2 | 1 sideラジア

あたしはしかめ面だった。

それはもう、この世で一番見たくないものを見たというような顔だったに違いない。

さっきまではご機嫌だった。

旅の途中に立ち寄ったこの国は、とにかく飯が美味い。

昼飯を食べるつもりで適当に立ち寄ったこの食堂も、味付けが素晴らしい。

「美味しいな！」

「うん、美味しいー」

そんな会話をリザとしながら、卓上に所狭しと注文した品々を堪能していた。

最高、久々に気分がいい。

そんな感じで至極ご機嫌に、あたしがエビフライを口に放り込もうとした時だった。

「探しましたよ、ラジア・ゼルダ」

聞き覚えのある声に、あたしは箸を止めたのだ。

そして今に至る。

目の前には、にこにこと笑顔を湛える黒髪朱瞳の美麗貴公子と、リザ。

リザが笑顔なのは、いつものことだけど。

「何で座ってんの？」

「貴女に用があるからですよ」

「あたしはない」

ばつさりと切り捨てて、エビフライを頬張る。

さっきまでご機嫌だったのに。

何でこいつが。

最悪。

何でこいつが。

「『何でこいつが』って顔してますよ」

「わかってるなら、どっか行って」

「ラジアちゃん、この人誰？」

押し問答をしていれば、リザが訝しげに、あたしに尋ねた。

そうか、リザは知らないんだった。

ぼんやりと思い至って、さて何と答えるべきかと考えあぐねていは。

「君が噂のリザ・レストル？」

先に、嘘くさい笑顔を湛えた紳士が、よくわからないことを口にした。

「噂の？」

何故かあたしが聞き返す。

何だ、噂って。

「ええ、巷で噂ですよ。『あの』ラジア・ゼルダが、旅のお供に美青年を連れているってね」

『あの』？

失礼極まりない、どういう意味だ。

ますます不機嫌になりながら、尚もエビフライを頬張る。
美味しいな。

鶏の唐揚げも行ってみようか。

そう思って箸を伸ばした時、リザが少し冷やかな声で言った。

「あんた、誰？」

リザがご機嫌斜めとは珍しい。

あたしが知る限り、人に冷たく当たったところなど見たことはなかった。

何か気に障ったのだろうか。

まあ、どうでもいい。

あたしは唐揚げを頬張りながら、その状態を放置することにした。

「ああ、失礼したね。私はルシア・アズガルド。ラジアの昔の恋人だよ」

すこぶる笑顔で、ルシアは面白くもないとんでもない冗談を言った。リザの眉が跳ねたのが、視界の端を擦る。

勘弁してくれ。

大人しく用件だけを聞いておけばよかったと、小さく吐息した。どちらにしろ、面倒なことには変わりないかもしれないが。

「本当なの？ラジアちゃん」

笑顔だけれど笑顔じゃない笑顔をあたしに向けて、リザが問う。本当に堪るか。

「違うよ」

「照れてるんですね。相変わらずだなあ」

ああもう、黙れ。

この場で吹っ飛ばしてやりたいのをぐつと堪えて、かちや、と箸をテーブルに置いた。

眉間の皺はそのままに、深く溜め息を吐く。

「……で？用って何」

それを聞くまでルシアは席を立たないだろう。
昔から、そういう奴だった。

「裏です」

その言葉に、あたしではなくリザが眉をしかめた。

『裏』。

知る者ぞ知る合い言葉、そしてあたしの本職。

「ここでは何ですよ。私の屋敷に部屋を用意しましょう。場所は……知っていますね、変わってませんから」

あたしを見てそう言うトルシアは席を立ち、薄らと嫌な笑みを残してから、食堂を後にした。

知らなければよかったとは、言うだけ無駄なので口にせず。

美麗貴公子は消えたが、美麗剣士はまだそこにいた。
当たり前だけれど……取り敢えず視線が痛い。

「……何？」

聞くだけ聞いてみる。

「……恋人、なの？」

「だから違うつて」

「……ほんとに？」

子犬の様な目で、その蒼い瞳があたしを見つめていた。
そういうのは困る。

溜め息しか出て来ない。

「俺、ラジアちゃんが好きだよ」

ここで何でそうなる。

意味がわからないし、溜め息の数が増えるばかりだ。

「結婚しても、傍に置いてね。愛人でいいから」

子犬の瞳をしたりザの余りに容貌と不似合いな発言にがっくりとうなだれて。

あたしは、唐揚げを黙々と食べ続けることにした。

刻は夕暮れ。

穏やかな気候のこの国の穏やかな風が、あたしの朱い髪をふわりと巻き上げる。

目の前には、昔と変わらないやたら豪華な洋館。いろいろな面倒な予感。

さっきの一件以来、リザはやたらとくつついて来る。

あたしよりだいぶ背の高いリザは、背中越しに抱き付いたまま離れない。

とにかく歩きにくくて、やっぱり溜め息が零れた。

「何なわけ？」

「俺、大きくなったでしょ」

「なっただけ」

だから、何。

大きくならなければ逆に問題である。

人間なのだから、成長するのは当たり前だ。

リザの言いたいことが掴めずに、あたしは首を捻った。

——ちゅ。

途端、リザの口付けが、そこに落とされた。

首筋が無防備になっていたらしい。

軽く睨みてはみたものの、効果は期待出来ない。

「何してんの、勝手に」

「俺がしたかったのー」

耳元を心地良い声が掠める。

リザは男にしてみれば、そんなに低い声ではない。

世に言う『甘い声』ってやつだと思う。

「発情してんの？娼館行く？」

あたしの提案にリザは少し不貞腐れた顔をしたが、何がそんなに面白くないのかわからない。

面倒くさい奴だな。

放っておこう。

そう決めて、あたしはやたらと大きな扉に手を掛けた。

——ばちいつ。

小さく閃光が走り、思わず顔をしかめる。

生意気に呪が掛かっていた。

人を呼び出しておいて、どという待遇なのか。

気に入らない、本当にあいつは何から何まで気に入らない。
わざわざ出向いてやったというのに。

まあ、あたしにしてみれば大した呪じゃない。

無理矢理こじ開ければ、ばちばちと、静電気のような音と小さな閃光が再び走った。

「無理矢理やったでしょ」

リザが背中越しに言う。

いい加減退いてくれないだろうか。

そんなことを思いながら、答えないままに足を進めた。

館の扉の呪も無理矢理こじ開け、迷うことなくルシアの自室に向かうあたしに、リザの訝しげな言葉が耳を擦る。

「来たことあるの？」

またもや答えずに、代わりに眉間に刻んだ皺を濃くした。

ようやく、ルシアの自室前に立つ。

気配がするということは、中にいるのだろう。

「むかつく」

部屋の扉の前に、思わず吐き捨てた。

何でたかが自室に、こんなに高度な呪^{じゆ}が掛かってるんだ。

吹っ飛ばしてやってもいいが、奴のことだ。

間違いなく賠償金を請求される。

しかも、事外に高額を。

それは悔しい。

「リザ、退^のいて」

リザはあっさり手を離れた。

あたしのやるべきことを理解したのだろう。

こういう時は聞き分けがいい。

印を組めば、目の前に魔法陣が小さく浮かぶ。

魔力を集中し、片手でそれを扉に叩きつけた。

魔法陣が光の粒となり弾け飛ぶと、音もなく呪は消し飛んだ。

「そんなに高度な呪だったの？」

再度あたしに抱きついて、リザが不思議そうにドアを見つめる。

リザには魔力がない。

拾った時から、全くなかった。

だからわからないのだ。

「むかつくほどに高度なやつよ。……あたしを試してる」

気に入らない、このあたしを試すだなんて。

これから多分、依頼をされる。

だからルシアは依頼主。

依頼主でなければ、ぶち殺す。

そう心に決めて、あたしは扉を無遠慮に開いた。

「流石ですね、ラジア」

部屋に入れば、ルシアは豪華なソファに身を沈めていた。

「むかつくのよ、昔から」

「貴女がいけないんですよ」

「は、あたし？」

につこりと微笑むルシアの言葉に、思わず聞き返す。
眉根を寄せて考えてみるが、何のことだかわからない。

「……わかりませんか。相変わらず鈍いんですね」

相変わらず腹立たいですね。

思ったけれど、飲み込んだ。

埒があかないことなど最初からわかっている。

「仕事の話でしょ」

向かいのソファにどかっと腰を下ろす。

リザも隣に座ってから、あたしの腕に、また抱きついてきた。

……もう、何も言えない。

「やたらと懷いてますね」

「俺はラジアちゃんのものだもん」

そうだったか？

リザの言葉に、あたしは首を捻った。

煙草に火を点け、二人を見やる。

笑顔こそお互いに絶やさないが、何故か睨みをきかせていた。
が、それこそ口にするだけ面倒な気がして、見て見ぬ振りをする。
美形二人が、何とももったいないことだ。

どうでもいいことを考えて、あたしは苦笑した。

「まあ、いいでしょう。そう、仕事の依頼をしたいんです」

穏やかに言っ、あたしに向き直るルシア。

「内容と報酬は？」

「もうお金の話ですか」

「大好きなの」

にっこりと笑顔で答えた。

「そうでしたね。ではまず、報酬から」

ルシアは立ち上がり、後ろの豪華な机の引き出しから、白い小袋を取り出す。

それをあたしの前の硝子テーブルの上に置いた。

じやらっという音に、口角を上げる。
この音に勝るものがあるかと問われたなら、ないと断言出来るに違いない。

「確認して下さい」

言われなくてもだ。
中身を見て、奥を掻き回す。
そしてあたしは――思わず顔をしかめた。

「……内容は？」

面倒なことになりそうだ。
予感は当たった。
中身は全て、金貨。
豪邸三軒は購入出来そうな大金である。

「玩具を手に入れたいんです」
「玩具……？」

そう言つて細められた朱い瞳に、あたしは、この上ない嫌悪感を抱いた。

2 | 2 sideリザ

ラジアちゃんは、ものすごい嫌悪感を頭にしつつも、依頼を受けた。ベッド脇の棚上には、さっきの小袋。金貨が詰まっているのを俺も見ている。

荷物袋に入れない辺り、表面上、受けただけかな。

そう思った。

ラジアちゃんはお金がとにかく大好き。

だから、こんな不用心に棚に置いておいたりしない。速攻でしまつか、絶対に離さないとばかりに手に持っているのが普通だ。

「しまわないの？」

「んー……」

俺の膝の上で、ラジアちゃんは顔をしかめた。

珍しいことに、俺は今、ラジアちゃんに膝枕をしている。

膝枕自体が珍しいわけじゃない。

普段は俺がしてもらっている。

だって、くつついていたいから。

珍しいのは、ラジアちゃんに膝枕をしているという現状。

「どうしたの？」

「んー……」

「さつきから、そればかりだね」

朱い綺麗な髪を梳きながら、思わず笑顔になる。
指通りのいい、長い髪。

俺の普段からの手入れの賜物だと思う。

ラジアちゃんとはにかく、外見に無頓着だ。

センスは悪くないし、寧ろいい方だとも思う。

ただ、髪とか肌とか、そういった女の子なら気にするべきところに
対して、全く関心が無い。

もったいないと思うけれど、それを気に掛け手入れをするのは、自
分だと勝手に思っているので言わない。

あの男も、ラジアちゃんが好きなのだろうか。

出会った時の言動からさつきまでの会話を思い出して、それが確信
に近いことに知らず顔をしかめた。

「ねえ、ラジアちゃん」

「んー？」

「あの人、何であんな依頼したのかな？」

ルシアの依頼は最悪なものだった。

「『玩具』って、お姫様のことだよね？」

「……そうだな」

浮かない顔で、ラジアちゃんは短く答える。

ラジアちゃんの仕事は、裏魔術師。

普通の魔術師は、薬草を作ったり、占いをしたりして生計を立てている。

ラジアちゃんも出来るらしいけど、滅多にしない。

理由は『お金にならないから』らしい。

大体、生活に必要なお金は、ラジアが賭け事で儲けたもので成り立っている。

ラジアちゃん本職の裏魔術師とは、相当な魔力と手腕、そして、信頼がないと出来ないらしい。

内容は主に、裏稼業と言われる類のもの。

殺人、誘拐、たまには国を滅ぼしたりもしたらしい。

詳しくは知らない。

少なくとも、俺が拾われてからは、そんな大層な仕事はしていなかった。

精々、お金を巻き上げたり、誰かをとつちめたり、用心棒だったり。それくらいものだ。

「あの人の依頼、どうするの？」

聞いてみたかった。

どうするのか。

標的は一国のお姫様。

そのお姫様を誘拐して、ルシアの館に閉じ込める。

ルシアが死ぬまで、お姫様の肉体の時を止めて、永遠に『玩具』にしたいらしい。

肉体の時を止める。

それは、ラジアちゃんほどの魔力がないと出来ないことだ。

そしてそれは――俺の夢。

「どうするの？」

瞼は閉じられたまま、黒い瞳は見えない。

僅か寄せられた眉根だけが、ラジアちゃん的心情を物語っていた。

「……お姫様次第、かな。ルシアとは面識があるらしいから」

「……そっか」

答えたラジアちゃんは、何故か悲しそうに見えた。

理由なんて俺には、わかるようではわからないに等しいけれど。

「何でそんなことするのかな？」

「……永い時を生きるから、だろ」

ルシアも魔術師なのか。
何だか納得したけれど。
けれど。

目を開けたラジアちゃんはものすごく切ない顔をしていて、その黒い夜色の瞳で、俺を見つめていた。

髪を梳く手が止まる。
時間も、気持ちも、俺には余裕なんてない。

永い時を生きるから、『玩具』が欲しいとルシアは言った。

多分、やり方はどうであれ、ラジアちゃんにはその気持ちがわかる
んだと思う。
同じだから。
同じなんだ。
だから、俺を育てた。
俺だったのは、偶然だと思うけれど。

「俺も……」
「リザは『玩具』じゃないよ」

俺の言葉を遮って、ラジアちゃんは優しく笑った。

——狡いよ。

それはきつと、嬉しい言葉。
だけどきつと、悲しい言葉。

それでもいいだなんて、そこまで言えば、きつと、ラジアちゃんに嫌われる。

きゅ、と唇を結んで、優しくも切ない笑顔をただ、何とも言えないままに見下ろした。

俺の夢は、やっぱり叶わないみたいだ。

知っていた、けれど。

ねえ、大好きなんだ。

大好きなんだよ。

口について出そうになる言葉を飲み込む。
今夜はきつと、言わない方がいい。

「……一緒に寝ようか」

素直に驚いた。

今日は珍しいことばかりだ。

「普段は嫌がるのに」

「たまにはね」

綺麗に笑んで、俺を見つめる。

「……だから、それは狡いよ」

「何のこと？」

答えてなんかあげない。

ただ、口から知らず零れたのは、俺の素直な欲望だけ。

「やっちゃうよ？」

「……いいよ」

感傷的になってるのかな。

そう思った。

俺にはわからない気持ちだから、何とも言えない。
何とも言えないけれど、やっぱり、そんなのは狡いんだと思った。

して欲しいと望むことは何だってしてあげる。

俺は、ラジアちゃんのものだから。

あの時からずっと、貴女だけのものだから。

「優しくするね」

「リザが優しくしなかったことなんてないよ。」

あまりに切なく笑うから、俺も切なくなつた。
身を屈めて、額に優しく口づけを落とす。

抱き抱えれば、ラジアちゃんは遠く視線を投げて笑つた。

俺じゃなくて。

でも、いいんだ。

俺だって今、つけ込もうとしているから。

貴女のその感傷に、入り込むだけの余地を探しているから。

闇の中、その柔い唇に口づける。

深く味わってから離せば、細い銀の糸が二人を繋いだ。

ラジアちゃんの唇は久しぶり過ぎて、やたらと興奮した。

「ねえ、大好き」

「……うん」

「大好きだよ、ラジアちゃん」

「……うん」

言わないと決めたのに、意志の弱い俺は、何度も何度も囁いた。

優しくするよ。

何だっていいんだ。

手に入れたいわけじゃない。

手に入れて欲しいんだ。

明日の朝、多分、ラジアちゃんは後悔するのだと思う。

それをわかっていて、俺は、俺の世界の中心を愛おしんで、貪るように、慈しむように、つけ入るだけの隙間に全てを埋め込むように、抱いた。

2 | 3 sideラジア

ありえないことをしたとベッドの上で後悔をしていた。

朝日がやたらと眩しい。

隣を見やれば、見事な銀髪が煌めいている。

閉じた瞼は長い睫毛に縁取られ、それは精巧な人形のように美しかった。

穢してしまった気になって、すぐに視線を逸らす。

そんな自分にまた、嫌になった。

起こさないようにそっとベッドから抜け出す。

スプリングが軋み、小さく音を立てた。

「あ」

小さく声を漏らし、何も着ていないことが、何とも情けなく思えた。

バスローブを羽織って、無駄に大きな窓際へと足を運ぶ。

カーテンを締め忘れた窓を開け、椅子に腰掛け煙草に火を点けた。

「……はあ」

溜め息が出る。

白い煙はゆらゆらと、行く先もなく消えて行った。

ああ、あたしみたいだ。

そんなことを思った。

行く先もなく、ただ、ゆらゆらと。
永い時を彷徨って。

「くだらない」

あの時、あたしも消えてしまえばよかったのに。
あの、朱い月の夜に。

「……くだらないな」

そんな思考自体、くだらない。

どうせ死ねはしない。

他人に殺^やられるなんて、あたしは御免だ。

あたしの人生はあたしで幕を引く。

あの時から、そう決めているのだから。

「……んー……」

「起きたか」

後ろのベッドでリザが軽く唸る。
振り向くことなくあたしは呟きを零して、一吐きした煙に、少しだけ目を細めた。

「……おはよう、ラジアちゃん……」

のそのそとリザが起き上がる。
眠そうに瞼をこすりながら隣まで来ると、床に座ってあたしの膝に頭を乗せた。

煙草をふかしながら、その銀髪を軽く撫でてやる。

「昨日は、ごめんな」

リザはにこつと笑っただけだった。
多分、わかっているのだ。

「俺、優しく出来た？」
「……優しくったよ」

優しくった。
痛いくらいに、優しくった。
だから切なかった。

あたしに向ける瞳が。
あたしに触れる手が。
あたしに触れる唇が。

応えられない、その想いが。

痛いくらいに優しく、様々な感覚に溺れては、ふとした一瞬に、泣きたくなるほどに。

「……ごめんな」

あたしは謝るしか出来ない。

どんなにそれが狡いことでも、それがまたリザを傷つけるだけであろうと。

感傷を紛らわすために、リザの気持ちを利用したのはあたしなのだから。

「ううん、いいよ。わかってるから」

気持ちよさそうに目を閉じて、リザはあたしの腰に手を回した。

「……いつか、」
「うん？」

聞こえなかった。
顔を寄せて、その端正な顔を見つめる。

「……何でもない」
「……そう」

聞かない方がいいのかもしれない。
そんな気が、した。

窓の外を眺めれば、微かな風が煙を攫う。
あたしの頬を掠めて行く。
少しだけ、

「……リザに救われたんだよ」

そう、少しだけ。

軽く額に口づけて、あたしはリザに微笑んだ。

ルシアの家で出された朝飯も早々に済ませ、あたし達は街に出た。
気を遣って出してくれたというより、あの朝食の場はあたしに対する嫌がらせとしか思えなかったから……というのが大いにあるが。
あいつの気に食わない顔を見てられなかったし、何はともあれ、情

報が必要だった。

「何で気づかなかったかなーあたし」

溜め息混じりに呟いて、辺りを見回した。

——ラグト国中央都市ハシルス。

東にジラート荒野、南にメメンテ砂漠、北にエンデ山脈を持つこの国は、中央から北に掛けて発展しており、その地域に王族や貴族が密集して住んでいる。

ルシアがいる街だとわかっていたら、絶対来なかった。

しかしながら、あたしは地名を覚えることが苦手だ。

この国のことでさえ、たった今思い出したばかりで、いつか滅びるだろう国をわざわざ覚えようという気がない。

「何年ぶりくらいなの？」

「んー……百五十年くらい？」

リザがあからさまに驚くので、何とも言えない気持ちになった。

「……聞いたことなかったけど、ラジアちゃんて何年生きてるの？」

『何歳なの』と聞かなかったのは、リザなりの配慮だろうか。
結局は同じなだが。

「……忘れた」

忘れたよ。

百五十年前のことも、ようやく思い出したのに。

少なくとも、その頃ルシアは、この国の王都専属魔術師だったことは確かだが。

「そっかー。まあ、それだけ経ってたらわかんないよ。街並み、変わったんじゃないのかな」

リザの言葉に、あたしは納得した。

そうか、変わったのか。

ルシアも、街並みでさえ、変わって行くのか。

あたしを置いて。

あたしだけが変われないような。

「俺は変わらないよ」

「え？」

「変わらないから」

にこっと笑って、そのままリザは前を向いた。

リザは時々、ものすごく鋭い。

見透かされたようで、ぎくりとした。

変わらないはずない。

変わらないものなんてない。

リザは歳を取って行く。

その内誰かと結ばれて、子を残して、老い、土に還って行く。

それはあたしより早く、あたしより確実に。

「リザはもう一人前？」

「ラジアちゃんは、何て答えて欲しい？」

「……何て、か」

自分で聞いたくせに曖昧な返答をして、あたしは苦笑する。

リザはただ、笑っていた。

ふいに一陣、風が吹く。

ほんの数センチにも満たないあたしとリザの間を、掠めて、通り過ぎた。

そうか。

そうだった。

これが、あたし達の距離だった。

曖昧に濁したその先なんて、最初から、わかっていたのに。

賑やかな街の喧騒が、あたしの気持ちを攫っていった。

「ねえ、どこ行くの？」

はっと我に返って、勢い良くリザを見る。

何を今さらなことに感傷的になっていたのだろうか。

「どうしたの？」

「……いや、何でもないよ」

何て聞かれたっけ……まるで聞いていなかった。

「どこ、行くの？」

そう、それだった。

「昔からの馴染みに」

「男？」

リザが嫌そうな顔をしたので、ルシアの時を思い浮かべて苦笑する。
相当あいつはお気に召さなかったらしい。
それはそうだ。

あたしだって、あいつは気に入らない。

「女だよ」

目に見えて安堵したりザに、あたしはまた、笑った。

少しばかり遠いので、魔術の短縮詠唱をしてぱちんと指を鳴らす。
次の瞬間、目の前の景色はがらりと変わった。

「すごい、転移術？」

「そう。あんたと二人なら大したことないしね」

これが詠唱なしで大人数なら、あたしは間違いなく倒れているだろうが。

「どれくらい離れてたの？」

「だいたい街三つ四つくらいじゃない？ここはラグトの東端、ワーカー街だった……かな」

ハシルスの如何にも中央都市的な小綺麗豪奢な屋敷達は見当たらず、
大通りには色とりどりのテントが市場を彩り賑やかだ。
バザール

ジラート荒野とメメント砂漠に隣接する街だけあって、乾いた空気
の中、土気色のレンガ造りの家が目立つ。

あたしの記憶が確かなら、目的地は裏通り。

朝だというのにそこは、やたらと薄暗かった。

くたびれた赤茶の看板に寂れた扉は、勢い良く開けたらそのまま外れそうだった。

扉にはまた呪が掛けてある。

この国は意外と物騒なのだろうか。

バチバチッと音を立てて、あたしは扉を開けた。

「無理矢理はお止しよ」

真夜中かと思わせる深い闇の奥から、声がした。

あたしは掌に灯りを出現させ、気にせず奥へと向かう。
その後を目を細めながらリザが付いて来た。

「久しぶりね、ビーチエ」

声の主の元まで行き、あたしは笑顔で、そう言う。

「……老けた？」

首を傾げ、ビーチエを覗き込む。

暫く見なかった彼女の目尻には、だいぶ皺が増えたように思えた。

「失礼な。あたしはあんた程 魔力がないんだよ」

「……お婆さん？」

暗がり目慣れたのか、リザはあたしの横に立ちビーチエを眺めた。

その顔はきょとんとしている。

「ふうん、これが噂のあんたの連れかい」

だから何なの、その噂。

あからさまに顔をしかめたあたしを気にせず、ビーチエはリザに問い掛ける。

「名前は？」

「あ、リザです。リザ・レストル。ラジアちゃんが付けてくれたの」
「そうかい、いい名前だ。あたしはビーチエ・カザリ。よろしくね、リザ」

名前を誉められたのが嬉しかったのか、リザはすこぶるいい笑顔で応えた。

「じゃ、必要事項をぱつと教えて。あ、簡潔にね」

ビーチエの前の小さな椅子に腰掛け、あたしは煙草をくわえる。

「用件も言わないのかい」

「あたしが来ることも、用件も、貴女はわかっていたはずよ」
「まあねえ」

にやりと笑んだビーチエを横目で見やり、火を点ける。

引き出しからやたら大きな水晶を出すと、ビーチエは卓上の布の上にゆっくりとそれを置いた。

リザは黙って、興味深そうにそれを見ている。

随分ゆっくりと時間が流れた気がする。

あたしは煙草をふかしながら、リザはわくわくと水晶を見つめながら。

ビーチエの伏せられたその目が開くのを、ただ、待っていた。

何度目かの煙を吐いた時、その目が静かに開かるのを見留めた。

「灰を落とすんじゃないよ」

「綺麗にしてくわ」

ばちんと指を鳴らせば、煙草も灰も一瞬で消え失せる。
多分、近くの灰皿へとも移動しただろう。

「詠唱もなしかい」

「当たり前でしょ。あたしを誰だと思ってるの」

「流石はラジア・ゼルダ。その名を伝説にするだけあるよ」
「で？」

さつさと先を促す。

あたしが聞きたいのは、どうでもいい伝説云々じゃない。

「見てみな」

ビーチエが水晶を指差す。

そこには、金髪紫瞳の女の子が映っていた。
年の頃は十七、八。

その顔立ちに、あたしは何となく見覚えがあった。

「んー？」

眉根をひそめて、ぐぐつと水晶に寄る。

何だったろう。

誰だったろう。

あたしは、知っている。

「……あ」

あたしと同じく考えていたらしいリザが、先に声を上げた。
あたしはまだわからず、首を捻ったまま、リザを見ている。

「……この人って、例のお姫様？」

「そうだよ、ルシアの目的さ」

そんなことはわかっている。

リザとビーチェのやりとりを眺めながら、舌打ちをした。

そうじゃなくて。

苛々と眉根を寄せたあたしを、リザがじっと見つめる。
何故か、複雑な表情を浮かべて。

「ラジアちゃん……わからないの？」

「え？」

わかりそうではわからない。

少なくとも、この姫君と面識はないはずだ。

なのに、知っている気がするのは何故だろうか。

喉まで出掛かって、ひっついてしまった感じに似ている。

やっぱり考えてもわからなくて、早く言えと、視線で訴えた。

「……このお姫様、ラジアちゃんに似てるんだよ……」

目を伏せて、リザは一言、そう呟いた。

その意味を計り兼ねて、水晶に視線を戻す。

「名前をアリア・リタリナ・ラグトリア。ラグト国第一姫君だ。目的は……言わなくてもわかるね」

アリア・リタリナ・ラグトリア。

この子がルシアの欲しがる『玩具』。

言わなくてもわかる……？

ピーチェの言葉が、暗闇に静かに響いた。

2 | 4 sideルシア

私のものにはならない。

だから私は『玩具』で我慢するしかないのだ。

——百五十年前、ラグト国中央都市ハシルス王城。

「ルシア様！」

小走りで駆けて来る女魔術師を見留めて、小さく溜め息を漏らした。
長く垂らした茶髪が小刻みに揺れている。

形容するとしたならつぶらであるう翡翠の瞳に、私はどのように映っているのか。

考えるまでもなく、目の前まで来たその女が嬉しげに笑って見せたので、また込み上げた溜め息を何とか押し戻した。

「どうしました？」

望むままに応えてやればいい、ただそれだけだ。

人好きしそうな紳士的笑顔を貼りつけければ、案の定、彼女の頬が薄らと染まった。

一瞬睫毛は伏せられ、そのまま目遣いに変換された媚びに、吐き気がする。

誰だったか——私が思考していることすら、考え及んでさえいないだろう。

「あ、あのっ……わたくし、ミレンツィア・ドリスと申します。お、覚えておいででしょうか!？」

「……ああ、愛称はミリーだったかな」

一度講師として出席した王都専属魔術師見習いの講習で、彼女の班を担当したのだったか。

器用に高等障壁を作り出し、なかなか素質があるように思えた彼女を誰かがそう呼んでいた。ようやく思い至ったことは、もちろん、微塵も出さない。

「やっぱり覚えていてくださったんですね!」
「もちろんですよ」

「やっぱり」と口にする辺り、浅ましさは垣間見える。つづらながらも妙な自信を宿した瞳に、私の真実は映っていないのだろう。

映してやろうとも思わないが。

私の腹の中など知らぬミレンツィアは、舞い上がったのか、つらつらと楽しみに話し出していた。

「今度あの『生ける伝説』の講習会に出席出来ることになったんです！嬉しくて、ルシア様にぜひ報告をと思いまして！」

——『生ける伝説』の。

噂は裏稼業の世界のみならず表世界にまで名を馳せ、生きていて尚『伝説』と呼ばれる裏魔術師……ラジア・ゼルダ。

「ルシア様のご教授の賜物で、あの講習会以来、わたくし、ずいぶんと認められるようになったんです！やっぱりルシア様の見る目は間違いないと申しますか、ルシア様付き見習いになっではどうかというお話もありまして……」

ミレンツィアの話は、全く聞こえていなかった。
媚びた上目遣いも気にならなかった。

『生ける伝説』である裏魔術師が、この国に来る。
彼女がどういった理由でつまらない講習会などやる気になったのかは知らないが、二つ名が本当であれば、それなりに私を楽しませてくれるに違いない。

少なくとも、ここの者達よりはよほど期待出来るだろう。

私はつまらないのだ。

永きを生き、大抵のものを見て大抵のものは手に入れて、大抵の者達は私を敬い、誉めそやし、崇め、そして憧れ、女という女は隙さ

えあらばと媚びて来る。

それはまた、男であつてもだ。

何も知らず、知ろうともせずに。

王都専属最上級魔術師の肩書きと容姿や上辺だけに騙されて。

私はくだらないのだ。

果てるはずだった時を自ら冒してしまったあの時から——全てが色褪せてしまったのだ。

白い大理石の豪華な細工を施した王城も、発展しつつあるこの国も、美しく才溢れるミレンツィアも……私には輝いて見えない。

「講習会ですか……私も参加しましょう」

「まあ、嬉しいですわ！」

何を勘違いしたのか、また頬を染めたミレンツィアが笑った。

どうでもよく、ただ、笑みを貼りつけた。

肩書きが功を奏したのか、私の参加はあっさりと受理された。

数日後には、噂の講師との懇談会と称した立食会にまで招かれる始末だ。

「『伝説』の裏魔術師か」

今ではすっかり馴染んだ自室で革のソファに腰を沈め、知らず口元は弧を描く。

ラジア・ゼルダ——彼女はこの国の違和感に気づくだろうか。
二つ名に恥じないだけの観察眼を見せてくれるだろうか。

いや……過度な期待はやめておこう。

彼女とて人間であることは違う。

ただ、その能力が常人のみならず魔術師としても、桁外れなだけなのだから。

たったそれだけの違いが、私達には大き過ぎる代償でもあるのだが。

それでも、私の期待は膨らむばかりだった。

口に含んだワインが、久しぶりに美味であると感じるほどに。

「ルシア様、探しましたわ！」

懇談会当日。

会場に入ってみたなら、目ざとくミレンツィアが駆け寄って来た。

ミレンツィアのみならず、すでに幾多の顔見知りかどうかさえ疑わしい者達に囲まれ、開場前だというのに、すでにうんざりせざるを得ない。

「最上級魔術師の正装がとてもお似合いですわ」

「紺色のベルベットに金系の刺繍が髪と瞳に映えて、流石はルシア様ですわね！」

「気品が漂っていますなあ」

「いつもとそんなに変わりませんよ」

寧ろ、膝まであるジャケットが鬱陶しいくらいだ。

何が「髪と瞳に映えて」だ。

黒髪短髪などそう珍しくもないし、朱瞳に限っては「血の色だ」と厭う者さえいることを知らないとも思っているのだろうか。

女達とはかく、年配の取り巻きの男達に限っては、腹の中でどう思っているかなどわからないものだ。

つくづく、人間とは恐ろしい。

そこまで考えて鼻で笑ったところで、ようやく、開場時間になったようだ。

壇上に上がった本日の司会役が、声帯拡張術までわざわざ施行し、嘘臭い笑顔で挨拶を始める。

「本日はお忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。では、早速ご紹介いたしますよう。今回の講習会特別講師——『生ける伝説』と謳われるこの方です！ラジア・ゼルダ殿！」

わあつと会場が沸く。

——が、

「……出て来ませんか？」

ミレンツィアが首を傾げるのも当然。

名を呼ばれたにも関わらず、ラジア・ゼルダは壇上に現れなかった。

「ぜ、ゼルダ殿……！？」

慌てふためく司会に被って、舞台袖からは何故か、揉めるような会話が途切れ途切れ聞こえてくる。

会場中ほどにいる私には、あまり聞き取れないが。

「ちょっと、呼ばれてんだから早く行きなさいよ！」

「嫌だね。だいたい何でこんな……」

「承諾したでしょー！？」

「あたしが知らないうちに、あんたが勝手に……！？」

どんつ、と押されたように、彼女はようやく登場を果たした。
空気が変わる。

わあつとまた、会場が沸く。

嫌そうに軽く会釈をしただけの彼女に、また、会場は沸いた。

「美女だと聞いていましたけれど、大したことないですね。わたくしの方がよっぽど……ねえ、ルシア様？……ルシア様？」

ミレンツィアの言葉はやはり、私の耳を素通りしていった。

朱い髪、夜色の勝気な瞳。

どこか、孤高であり孤独が何たるかを理解しているかのような……
あの、人を寄せつけない雰囲気。
私と同じ色を持ち、私以上の魔力を持つ女。

「……初めてだ」
「え？」

グラスを二つ手にした。
何か言おうとしたミレンツィアを残して、私の足は彼女へと向かっていた。
求めていた運命との出会いに、感じたことのない胸の高鳴りを感じて。

「初めまして」
「あん？」

群がる者達を堂々と蹴散らして、彼女は肉を貪り食っていた。
骨つき肉にかぶりつきながら振り向いたその夜色に、完璧な笑みを浮かべた自分が映り込む。

ぞくりと、背筋が震えた。

自分以上の魔力に対しての畏怖か、はたまた、これを情欲と呼ぶのか。

どちらも感じる環境になかったので、私にはわからなかった。
こんな状況での対面にそんなことを感じた自分に、初めて、可笑し

くて笑いさえ込み上げたのだ。

「飲みませんか？ラグト産の砂漠酒はなかなかいけますよ」

「砂漠酒？」

笑ってしまっている私など気にもせず、彼女の興味はグラスの中身に釘づけになっている。

それがまた、私には嬉しかった。

「メメンテ砂漠のオアシス水を濾^ろ過して、現地でしか取れないガジユの実を漬け込んだ酒です。魔術職人が造っているので、なかなか高価だそうですよ」

「砂漠で造ってんの？」

「ええ、そうです」

ふうん、と言ってグラスを受け取った彼女は、一気にそれを飲み干す。

「美味い！おかわり！」

「お持ちしますよ、ゼルダ殿」

途端、むっとした顔が間近にあった。
襟首を掴まれたのだと認識するのに、数秒を要する。

「ラジア」

「……え？」

「ラジアでいいわ」

呼び方が気に入らなかったのか。

「……私はルシア・アズガルド。ルシア、と」

夜色の中の私は、別人のように、素直に笑っていた。

彼女との時間は驚くほど早く過ぎていった。

永く永い時に囚われ、遂には自ら飛び込んでいった私が言うのも可笑しいが、それだけは確かだった。

さして表情を変えることない彼女ではあったが、美味しいものを食べ、金について語る時だけは、夜色の瞳に嬉々とした光が宿ることもわかった。

人は彼女をがめついとさえ言うだろう。

現にその要素は充分にある。

しかし、それを上回るだけの要素が、私を捉えて離さなかった。

私以上の魔力と、一切感じない媚び。

ミレンツィアは大したことがないと断言したが、私と同じ朱と黒を持つ彼女は、私の目には美しく映っていた。

興味さえないような冷めた目に、啼かせてみたいという思いさえ湧き上がってくる。

そう——啼かせてみたい、この腕の中で。

私以上の力を持つ彼女を、私の力で屈服させてみたい。

「そういえば、」

よからぬ思いを察したのかどうか、彼女はふと、口を開いた。
伸ばした手をそつと握る。

「……どうかしましたか？」

「この国、何で幻術なんか掛けてあるの？」

気づいていた。

今まで誰も気づかなかったそれに、初日から彼女は気づいていた。

ぞくぞく、と感動で肌が粟立つのを感じた。

「幻術、ですか」

「気づいてたでしょ」

冷めた目が、私を見据えていた。
その中に、打ち震える私を映して。

「これだけの大規模な幻術、施行出来るのはあんたしかいないと見たけど――違う？ルシア」

ああ、運命とは本当にあつたのだ。

「ルシア……！？」

「やっと効いてきましたね」

ぐら、と傾いたその体をやりわりと受け止めて、そつと、会場を抜けた。

この屋敷を『自らの』ものだとして認識するのに、どれほどの時間を費やしたであろうか。
私を『ルシア・アズガルド』であると認識するのと、同等の時であったように思う。

ラジアをソファに横たえ、その両手に封魔の錠を掛けた。

「悪く思わないでください」

その言語に反応するように、ぴくりと瞼が動く。

意識はあるのか。

「眠られたかと思っていましたよ」

「ふざ……け……んな……」

盛った睡眠薬はかなりのもの。

常人ならずとも、上級魔術師であろうと、まる一日は目覚めることがない代物だというのに、やはり彼女は大したものだ。
ただ、

「それで精一杯のようですね」

おとなしく錠を掛けられた辺り、身動きは取れないらしい。

案の定、悔しげに唸った程度で、小さく溜め息を漏らしたきり、黙ってしまった。

これで彼女は私のもの。

無意識に笑みを湛えた自分が、夜色の中に映っていた。

「退屈させるつもりはありませんが、一つ、昔話をしてさしあげましょう」

ボトムを留める腰紐にするりと指を挿し込み、それをゆっくり解き

ながら、片手で滑らかな皮膚を楽しむ。
彼女は何も言わなかった。

「今からそう……何十年前でしたか。百年はいかない程度の昔ですよ。この国に、一人の魔術師がやって来たんです」
「……」

腰紐を解き、その指がするりと白い腹部を撫で上げる。

「その魔術師は大層な魔力を持っていたんですが、残念なことに、魔力消費型でした」

「……っ！」

胸に到達するかしないかの辺りで、華奢な体が反応を見せる。
話に反応したのか、はたまた、そこが悦ぶ場所だったのか。

「ご存知でしょう。魔力ある者は、食物摂取や休息により魔力回復をし、いつまでも若々しくいられる持続型と、使用することに魔力を消費し、回復することなく老いていく消費型がいます。貴女はまさに前者だ。——その魔術師は精力を吸い取ることで永らえていたんですが、自らの老化した容姿をとて憎んでいました。人の精力なぞ、吸収したところではたかが知れています。精精、保って十年程度ですからね。結局は老いてゆく」

老いには逆らえない。

人は皆、そうして死んでいく生き物だ。

耳元をなぶりそのまま舌を這わせれば、びっくりと面白い反応を見せた。

「ああ、耳が善いんですね。……そうそう、魔術師の話でした。あの日その魔術師は、老いることのない容姿に発狂寸前の持続型魔術師に出会ったんです。彼の望みは、老いを恐れる魔術師とは、全く逆のものです」

耳たぶを甘噛みし、囁くように続ける。

愛の告白ではない。

「魔術師はずっと、自らを若返らせるための研究を続けていました。そんな魔術師に、彼は言ったんです。『肉体を交換しないか』と」
「!?!」

敢えて彼女の瞳は見なかった。

どんな顔をしていようと、それはきっと、私の望んだ顔ではない。

「術は施行されました。研究の成果あつて、成功したんです。魔術師は彼に、彼は魔術師になったんですよ——!?!」

——ドガアァン！

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

動かそうとした右腕が反応しなかったことで、ようやく、自身が壁にのめり込んでいたことを知る。

もうもうと立ち上る煙の中、彼女は立っていた。

「……流石ですね」

「こんなもので、あたしを拘束出来るとでも？」

崩れゆく封魔の錠を一払いし、彼女の夜色が、しかと私を見留めていた。

「魔力を溜めていたわけですか」

なるほど、だから無抵抗だったと。

「答えて」

彼女の問いは、わかっていた。

私は私で在るために、自然の理を冒し、『私』で在ったことを放棄したのだ。

今の私で在るためこの国に莫大な幻術を施行し、そのために犠牲も

厭わなかった。

私と『私』の関係を知る者、疑惑を持つ者、懸念する者、全ての者を礎に、この幻術は成り立っている。

私が私で在るために。

「貴方の——本当の『名』は？」

「私は——」

その『名』を知るのは、今でも、ラジアだけ。

あの時殺してくれたなら、私はもう、足掻くことさえなかっただろうか。

「あの青年を共にしたという噂を聞いた時の私の気持ちなど、永遠にわからないのでしょうかね」

だからせめて、『玩具』だけでも、私の傍に。

2 | 4 s i d e ル シ ア (後書き)

2011年1月7日更新完了。

2 | 5 sideリザ

ビーチェさんの所からの帰り道、ラジアちゃんはずっと無言だった。

複雑な顔をしていたけれど、多分それは、ルシアの気持ちを理解してのことじゃないと思う。

『何で』っていう顔だ。

ラジアちゃんは大概鈍い。

わかりやすく、わかって欲しくてあからさまにしていた俺の気持ちにさえ、気付くのに随分掛かったほどだ。

ラジアちゃんは本当に鈍い。

それは、他人は愚か、自分にも執着していない何よりの証しのように、気づくたび、俺はこわくなる。

そこまで考えて、本当にこわくなってふるりと首を振った。

あのお姫様は不憫だと思うけれど、俺はそんな他人より、誰よりラジアちゃんが大切だから。

ラジアちゃんの傍にすることが大切だから。

俺はルシアみたいに、誰かを代わりには、出来ないんだ。

「おう、姉ちゃん。いい飲みっぷりだなー」

やんややんやと騒ぎ立てる人達の中で、ごっごっとう喉を鳴らしな

がら、ラジアちゃんはひたすらに酒を煽っていた。

椅子に乗っかり、片足はテーブルに乗っけている。
足下には無数に転がる酒瓶、卓上には山盛りになった吸い殻と食べ散らかし。

「おう。兄ちゃんはあるの姉ちゃんの連れかい？」

「そうー。豪快でかつこいいでしょー」

「違いねえ！」

負けじと豪快に笑って、おじさんは俺の背中をばしばしと叩いた。

もやもやするのかもしれない。

何が、なんて俺には計り知れなくて、掛ける言葉は見つからない。

こんな気分の時、ラジアちゃんはいつも、浴びる程 酒を飲む。

だからただ、ひたすらに傍にいて、飽きるまで付き合うしかないし、それが出来るのは今のところ自分しかないと思っている。

同じテーブルにいたので、顔を上げれば目の前にはすらりと伸びた白い脚。

深くスリットの入ったスカートを穿いているから、太腿までが露わになっている。

「見えちゃうよ？」

一応、声を掛けてみる。
聞いてないだろうけれど。

「何っ？よし、賭け事やるか！」

誰もそんなこと言っていないけれど……。

わーっと歓声が上がリ、うやむやの内にカードゲームが始まる。
勿論、ラジアちゃんの一人勝ち。

たんまり稼いだお金を眺めて、にんまりしている。

「可愛いなあ」

「兄ちゃん、あの姉ちゃんの恋人かい」

おじさんの言葉に、目を剥いて驚いてしまった。

「……そう、見えるかな？」

「それ以外に見えねえよ！」

やばい。

もう、どうしよう。

顔が緩むのを必死に両手で押さえていれば、おじさんは豪快に笑って、酒瓶を担いでどこかへ行ってしまった。

「あ」

気づけば、いつの間にかテーブルに突っ伏し寝入ってしまったラジアちゃんが目に映る。

それでも巻き上げたお金を離さないのは、いかにもラジアちゃんらしい。

凄いな、幾ら稼いだんだろう。

酔っ払っていても強いなんて、流石としか言いようがない。

「よいしょっと」

寝入ったラジアちゃんを背中に乗せて、勘定を済ませ外に出る。

俺の肩に顔を乗せて、すうすうと気持ちよさそうに寝息を立てるラジアちゃんを見た。

可愛い。

どうしよう。

大好きだ。

朱い髪が、俺の肩から滑り落ちる。

脛を縁取る長い睫毛が、白み始めた月灯りに照らされて白い肌に影を作る。

その額に軽く口付けると、ラジアちゃんは少し身じろぎをした。

無防備過ぎるよ。

ねえ。

「ラジアちゃん」

少しでいいから。

「……俺のこと、すき？」

……応えない、なんて、わかりきっているのに。

当たり前だ。

ラジアちゃんは寝ているのだし、起きていたら尚答えてはくれないと思う。

寧ろ、起きていたら俺はそんなこと怖くて聞けないだろうから。

「……うん……」

小さな小さなその声に、思わず足が止まった。

「……ラジアちゃん？」

名前を呼んでみるけれど、反応はない。

耳元を規則正しい寝息が掠るばかりだけれど、それでも、嬉し過ぎ

て、思わず泣きそうになった。
わかってる。

あれはただの寝言で、応えてくれたわけじゃない。
それでも――。

俺はやっぱ、ルシアみたいに誰かを代わりには出来ない。

今ここに、愛しい人がいて、今ここで、愛しいと思うことが出来る。

「俺、諦めないからね」

大好きだから。

だからずっと、いつまでも、俺の世界の中心でいて。

すやすやと眠る俺の世界にもう一度口づけて、そのアルコールの匂いに、少しだけ笑った。

2 | 6 sideラジア

あたし達は城内にある一つの塔の屋根にいた。

「ねえラジアちゃん、俺達、迷ったよね？」

答えなかった。

答えたくないし認めたくない事実の前に、ただ、無情にも風がひゅう、と小さく鳴いて通り過ぎる。
微かな風に髪を揺らされながら、あたしは考えていた。

さて、どうするか。

「地図があればねー」

「あんたが落としたんでしょ」

「ちよつとぼんやりしちゃった。ごめんね」

リザが暢気に、にこつと笑う。

絶対悪いと思っていない。

何をどうして人は『絶対』とするのか——そう、何をどうして、あたしはこいつに地図を預けてしまったのか。

「血迷ってたとは思えない」

リザを拾った時点で、それはすでに時遅しであろうが。

「ごめんね、ラジアちゃん」
「本当にね」

間髪入れずに返したなら、流石に少し、しゅんとしたらしい。

城内は、予想以上に広がった。
税金を無駄遣いしてるとしか思えない。

人間はこういう権力誇示が好きだな。

顔をしかめて、広大な敷地と豪奢な建物達を見下ろした。

あたしにはわからない。
あたしは人であって、既に人ではない存在だから。
どんなに豪華絢爛なものを建てようと、いつかそれは塵となる。
真の『永遠』は存在しない。
わかっていて尚それに縋るのは、愚か者のすることだ。

「愚か者、ねえ……」
「ルシアのこと？」

今度は間髪入れずにリザが呟きを拾った。
何あんだ、あいつをそういう目で見てたわけ？

確かに間違いじゃないかもしれない。

ただ、ルシアをそう呼ぶならば——いや、やめておこう。

ビーチエの説明を思い出す。

三角形の屋根。

白い煉瓦。

さほど大きくないバルコニー。

そして、歌。

曖昧な説明だな。

「あんたが責任持って探しなさい」

リザに向かって、ぱちんと指を鳴らす。

目を瞑り、リザは耳を澄ませた。

「……あ」

「聴こえた？」

「うん、あっち」

ぱったり魔術が効いたらしいリザが、右前方を指差した。

リザは直感が鋭い。

第六感と呼ばれるものや特別な能力は無いが、五感に関しては能力者並みのレベルだ。

いや、それ以上かもしれない。
簡単な魔術を掛けてやるだけで、期待以上の力を発揮する。

魔術師っていうのは魔力を持つだけあって、皆大体、それに頼りがちだ。

あたしも例に漏れないので、リザがいると、何かと便利で助かる。

「誉めてー」

「何で」

あんたの所為でしょ、あんたの。

「だって誉めて欲しい」

「……はいはい。よく出来ました」

柔らかい銀糸を撫でてやると、リザは嬉しそうに目を細めた。

幾つになっても変わらないな。

そう思った。

リザの言葉を思い出す。
そういう意味だろうか。

あたしは苦笑した。

変わらないものを求めてどうする。
変わらないのは、あたしだけでいい。
あたしはその夢を叶えない。

『永遠』は、ない。

「行くよ」

リザに一瞥くれて、あたし達は屋根伝いにその方向を目指した。

そして、誘導しながら先を行くりザを眺めて、ふと思う。

「目立つな」

「？何が？」

「あんたの髪」

月の光を受けてきらきらと、やたら光を振り撒いている。
隠密行動にその自己主張はない。

普段はその目立つ容姿で切り抜けられる事柄も多々あるが、今は余計な色と代物に過ぎなかった。

指を鳴らせば、眩いばかりの銀色は黒へと色を変える。

「わ、すごい」

何故か嬉しそうにはしゃぐリザを促して、あたし達は目的地へと急

いだ。

目的地を何とか探し出し、いざ突入しようとするれば、何やら中では揉めていた。

歌っていたかと思えば揉めていたり、お姫様は多忙な様だ。馬鹿らしい。

「何？」

窓越しに覗き込んでみる。

あたしの肩越しに、リザもひょこつと顔を出した。

「お父様、お止め下さいっ！」

「アリア、私は……っ！私にはお前しかいないのだよ！さあ、今度は私の腕の中で歌っておくれ！」

「嫌！」

——ぱしんっ。

何とお約束な。

お父様ってことは、この国の王だろう。

私の腕の中で歌ってくれとは、反吐が出る。もっと他にやるべきことがあるだろうに。

「お姫様って養女なの？」

「実の娘。ルシアと同等の変態だな」
「お姫様、泣いてるよ」

リザはそう言っ、あたしの頬に軽く口づけた。
何でこの場面でそうなる。

「話聞いてた？」

「俺はラジアちゃんを泣かせないっていう約束」

にこつと笑ったりザの、見慣れない黒髪が揺れる。
眩しくもないのに、目を細めたあたしがいた。

「……あ、そ」

誰もいなくなった部屋に、アリア姫の泣き声だけが微かに響く。

「……ルシア様……わたくしを助けて……っ！」

なるほど。

よくはわからないが、だいたい予想はつく。
そういう台詞を思わず口走るような、そういう顔見知りなわけか。

「連れて行ってあげようか」

『永遠に』だけれど。

窓から侵入しながら、あたしは声を掛けた。

驚きに目を見開いて、アリア姫は、ただ、あたしを見ている。

「……どうする？」

「……何故？」

「それが仕事だから」

「貴女は……」

「それは答える必要がない」

沈黙が流れた。

湛えた紫瞳が微かに揺れる。

似ている様で似ていないと、あたしは思った。

「……連れて行って」

「もっと辛いことになっても？」

何が彼女にとって辛いことなのか、何で、わからないけれど。

ルシアの本当の目的なんて、わからないけれど。

彼女があたしに似ているということが、偶然とは思えなかったから——言わなくてもいいことを敢えて、口にした。

「あいつの元へ行けば——『永遠』に帰っては来れないけど」
「……それでも」

金髪を微かに揺らせてあたしを見据えたその紫瞳は、女の瞳をしていた。

彼女はそれを選択した。
真の『永遠』なんてない。

けれど、偽りの『永遠』^{それ}は、思うよりたくさん存在し、不確定な要素を孕んで、口を開けているものなのだ——。

「じゃあ行くよ。この黒髪が、貴女を抱えるから」
「失礼するね」

リザは笑顔で——アリア姫を担ぎ上げた。

「ぶ、無礼者！」

まあ、そうなるだろう。
真っ赤になってそう叫んだアリア姫としては、華麗に優雅にお姫様抱っこを思い浮かべていたに違いない。

あたしだってまさか、そんな米俵をひょいと担ぐような抱き上げ方をするとは思わなかった。

リザの外見からも、想像出来ない扱われ方だったと思う。

思うが、合理的ではある。

憤慨しているアリア姫に、リザはにこりと、場違いなほどの笑みで答えた。

「だってほら、追っ手が来てるから戦わないといけないかもしれないし」

追っ手？

と、あたしが首を傾げたなら、ようやくその耳にも階段を駆け上がる音が聞こえた。

「ああ、あんたの耳、まだ術を掛けたままだったっけ」

「お姫様が叫ぶからだよ」

「だって……っ！」

「うるさいなあ」

にこりとまた同じ笑みで、しかし、冷ややかに向けられたリザの蒼い瞳に、ようやくアリア姫はその口を引き結んだ。

ばたん！と勢いよく扉が開く。

「アリア様！」

飛び込んで来たのは、見知らぬ魔術師の女とその他大勢。

「ミレンツィア！」

アリア姫が叫ぶ。

その姿はさながら、連れ去られる人質と映ったことだろう。

「わたくしは行きます！」くらい言って退ける気概を見せて欲しいものだ。

が、ミレンツィアと呼ばれた王城専属魔術師は、彼女を見てはいなかった。

「……ラジア……ゼルダ——？」

ぽつてりとした肉欲的な薔薇色の唇から零れたのは、あたしの名前だったのだから。

さて、あたしはこの魔術師と面識があっただろうか。
覚えはないが、残念なことに、あたしはそれなりに業界では有名だ
そうなので、知っていても不思議はないけれど。

ばらばらとその他大勢の王城お抱え兵士達が、じりじりと、しかし、それなりに素早くあたし達三人を囲い込む。

——リザの背後以外を。

「逃がさなくてよ、ラジア・ゼルダ」

「……会ったことあった？」

明らかに浮かぶ憎悪の色に、思わずそう投げ掛けた。
のが、そもそもの失敗か。

長くなりそうな予感がして、ちらとりザに目配せをする。

小さく頷いたリザは、背後の窓から、ひらりと、前触れなくアリア姫を抱えて飛び降りた。

「き、きゃあああ——むぐっ」

「ア、アリア様！」

急な展開についていけなかったのか、しばし固まる王城お抱え兵士達とミレンツィア。

「あんた達、そんなんじゃまだまだだな」

ふんと鼻で笑って、あたしも続いて脱出した。

「お、追え！賊を逃がすな！アリア様を奪還せよ！」

背後の塔から聞こえたミレンツィアの怒声と、追って放たれた火炎系魔術の無数の矢を避けながら、ひたすらに屋根を走る。

「気絶させたの？」

「だってうるさかったんだもん」

追いついて隣を走るリザは、またも邪気のない笑みで、どうでもよさげにそう言った。

「ラジア・ゼルダ——貴女の所為で、ルシア様は……！」

——すっかりあたし達を見失った後、ミレンツィアが、美しい顔に憎悪を滾らせそう呟いていたことをあたしは知らない。

カツカツと靴音が響く階段を降りて、地下室のドアの前に、あたし達は立っていた。

あの後、アリア姫を抱えたりザと共に城を抜け出して、今、ルシアの屋敷にいる。

リザの髪は、すでに銀色に戻っていた。

ドアがゆっくりと開かれる。

錆びた音の後に現れた光景に、アリア姫は呆然と目を見開いた。
あたしはただ、嫌悪感に顔をしかめるだけ。

「……そん、な……」

呟きを零して、あたしを見るアリア姫。

「言っただけ」

あたしは非情に言い放った。

そう、言っただけ。

それでも答えたのは、貴女。

「『時間』は？」

ルシアに言われ、あたしは一粒の錠剤を差し出す。

立ち尽くす彼女の背を優しく押しながら、ドアが閉まる瞬間、ルシアがあたしを見た。

「私は手に入れましたよ」

一言だけ呟いて笑むと、ドアは閉められた。

ルシアは手に入れた。

何を？

『玩具』を？

しあわせを？

偽りの『永遠』を？

あたしは、リザがそっと握ったあたしの手を、握り返すことしか出来なかった。

——『永遠』なんて、ない。

Witch of Golden Islandミレンシア(前書き)

ルシアとミレンシアの過去話。

Witch of Gloden・i sideミレンツィア

ラグト国中央都市ハシルスより三日三晩馬車を走らせた最北部には、名も無き森と呼ばれるグレーデン地区がある。

ここには古くから『グレーデンの魔女』の言い伝えがあり、森の中の名も無き丘には、彼女の館が静かに、不気味に佇んでいるという――。

「で？」

あからさまに侮蔑の視線を向け乱暴に書類をデスクに投げたわたくしに、部下であるロイズの肩がびくつと揺れた。

上司とは言え何十と年下のわたくしに萎縮するとは、魔術師としての情けない。

背丈ばかりひよろひよろと伸びて、実力は二十歳にもいかないわたくしより圧倒的に下。

世間では『儂げな美少年』などと騒がれているらしい緩くウェーブしたボブの白金髪ブラチナブロードに同色の瞳を湛えたロイズ・フェアニーへの印象は、そんなものだつた。

「あ、あの、それで……」

「はつきり喋ってくださらない？わたくし、これでも多忙なんですよ。部下ですのに、そんなことも把握していないと？」

用件など先ほどの書類で十分に理解はしていたが、とにかくわたしは彼が最初から気に入らなかった。

あの『生ける伝説』の講習会から半年、わたしは王都専属魔術師見習いから、王都専属魔術師に昇格していた。

これだけの素質と実力があれば当然のことだと思った。

だからこそ、直属の部下にも、それ相応の者が当てがわれるものだと思うっていたのに、やって来たのは、おどおどとした彼だったのだ。

わたくしほどの人材に、彼が部下？

——信じられない！

あまりのことにロイズの経歴を片っ端から調べ尽くした。

特筆すべき点はなし。

特技もなし。

ただ、魔力測定値のみが測定不能と書かれているだけで、魔術学校の成績も上の中といった程度だ。

愕然としたのは言うまでもない。

もちろん、部下としての仕事ぶりも可もなく不可もなくである。

美少年と言えど、わたくしに比べたなら大したことはない。

それは『生ける伝説』にも言えることだが……あの講習会のことをふと思い出して、腸が煮えくり返りそうになった。
知らず、ロイズへの視線がより厳しくなる。

「で、すから……み、ミレンツィア様には、『グレーデンの魔女』討伐隊編成を、お、お願いしますっ！」

「そんなことわかってますわ」

「えっ」と間抜けな声を発したロイズを無視して、くるりと椅子を反転させた。

これは、出て行けという合図。

「……し、失礼、します……」

消え入りそうな声が僅か鼓膜を打ち、静かにドアは閉められた。

——『グレーデンの魔女』か。

「お伽話だとばかり思っていましたわ」

数百年も前から語り継がれたその物語はあまりに有名で、また、グレーデン地区には人が住んでいないこともあり、個人的には半信半疑だった。

具体的な記述があるわけでもなく、そういった類の話は世の中にゴマンと溢れている。

いちいち真偽のほどを確かめるほど、国の専属魔術師達は暇ではないのだ。

そしてつい一ヶ月前のこと。

グレーデン地区に隣接するパピロの町から、薬師やくしの娘が薬草を採り

に森へ入って行ったらしい。

これは娘の祖母や町の住人達からの確かな証言であり、実際、森へと入って行く姿を見た者もあると言う。

しかし、一週間経っても娘が帰らないので、第一次搜索隊が町の役所より派遣された。

これが二週間前のこと。

搜索隊が帰還しないので、今度は祖母がなけなしの金で雇った裏魔術師を派遣し——やはり帰還はしなかった。

裏魔術師なんて無法者を雇うからだとは思うが、それなりに近辺では名の通った者であつたらしい。

辺境であることを考慮して、町の搜索隊よりは、と言ったところか。

ついには話が大きくなり、伝手の伝手を辿って、ここまで話が舞い込んで来たわけだ。

どうやら娘の祖母は、王城に勤めていたことがあるらしい。

「魔女を見たというわけではないのですわね」

ぺらりと書類を捲れば、ロイズがまとめた『グレーデンの魔女』についての記述があつた。

『グレーデン伝承記』『ラグト国記』『ラグト建国史』『魔女伝説』——様々な書物から『グレーデンの魔女』についての記述抜粋が成されているが、どれもが言い伝えの域を出ない。

ただ一つ、目に留まった一文があつた。

“——『グレーデンの魔女』が最初に確認されたのは、百七十年前である——”

——百七十年前？

引用は『世界の伝承一覧』……いまいち、信用出来なさそうな本ではあるけれど。

立ち上がり、執務室の本棚からそのタイトルを探し出す。

「あつた……発刊は二十年前ですわね」

裏表紙に初版とあるので、つまりは百九十年ほど前ということだ。魔術師の平均寿命は三百年。

とすると、割りと最近であることに、少しだけ驚いた。

まあ、魔力自体がピンからキリまで個体差が激しいので、この平均は飽くまでも平均の域を出ず、参考にはならないけれど。

実際、三百年以上生きている現役魔術師をこの城で挙げるなら、最上級魔術師であろうと数人しか……

「……あ」

ふと思い当たって、胸が高鳴った。

「ロイズ！」

「は、はい、ただ今！」

軽く声を上げたなら、すぐさま、返答と共にドアがノックされた。いつも反応だけは一人前だが、果たして彼は、きちんと職務を全うしているのだろうか。

入室を促し、相変わらず俯きがちな彼にほんの少し目を細めてから、口を開いた。

「王城で二百年以上勤務している魔術師は誰ですの？」

わたくし自身、この地位に身を置いていようと、実質十八年しか生きてはいない。

しかしながらロイズは実齢五十七歳であり、少年の姿をしていても王城勤めは長い。

少しは知識に明るいだろう。

彼は僅かに考えてから、おずおずと返答した。

「知る限りで、は……せ、専属魔術師総括のディノ様と最上級魔術師のバーベナ様、ラキューシア様、貴族でもあるルシア様の四方で、すが……」

——決まりだ。

わたくしがほくそ笑んだことをロイズは見ていただろうか。
どちらでもいいけれど。

デイノ様は総括であらせられる以上、多忙を極めていらつしやることは想像に容易い。

バーベナ様は消費型魔術師でありご老体であるし、ラキューシア様は確か他国に出張中のはずだ。

「ルシア様に連絡を。お伺いしたいことがあります、と」
「か、かしこまりました」

一礼し退室したロイズを見送って、うきうきとクローゼットを漁り出した。

翌日のよく晴れた午後一番の時間。

お気に入りの刺繍入りブラウスに専属魔術師正装である紺色の膝まであるロングジャケットを着て、待ち合わせ場所へと向かった。
本当なら正装する必要などないけれど、ルシア様にはぜひ、わたくしの成長の証を見ていただきたいもの。

ルシア様——ルシア・アズガルド様はラグト国の上級貴族であり、王都専属最上級魔術師でもあるという稀有な方。

この国の貴族は国政に関わることが多く、上級ともなれば多忙を極めることも多いと聞く。

貴族自体が血筋によるもので、それを優先するあまり、魔力があるうと魔術師になる者は少ないと言いつのに、魔術師であることさえも極められた素晴らしい方なのだ。

そして容姿も凛として美しく、紳士的な態度は、常に様々な人々から賛辞を受けてやまない。

ライバルが多いと、如何に上手く出し抜くか、乙女としては重要事項！

努力に努力を重ね、尚且つ、このあまりある資質と美貌はまさに！まさに、ルシア様のお傍にいるに相応しいのに！

なのに……あの講習会の後、ルシア様は『生ける伝説』を伴って、会場を後にしたと聞いた。

ラジア・ゼルダ——あの女が登場した瞬間から、ルシア様はわたしの話を全く聞いていらっしやらなかった。

しかも、わたくしを置いてさっさと……。

いいえ。

きつと、伝説と呼ばれるほどの裏魔術師が珍しかったに違いない。

噂によれば総括のデイノ様より長生きで強いそうだし。

そんな女はもう、化け物級だ。

変わりダネの話を聞くのも一興つてところに違いない。

きつと、一緒に出て行ったのも、そんな理由。

自分で立てた仮説に「なかなか悪くないですわね」と一人呟いて、すらりとした立ち姿を目にし、思わず微笑みが浮かんだ。

「お待たせして申し訳ありません、ルシア様！」

たたつと駆け寄ったなら、「……ああ」と、こちらを向いて微笑んでくださった。

「ミリー、専属魔術師に昇格したんですね。おめでとございます」
「は、はい！ありがとうございます！」

嬉しい！

嬉しい、嬉しいです、ルシア様！

貴方のその笑みがわたくしのみに向けられていると思うだけで、体中の血が滾り心臓が止まるほどに！

ルシア様は滅多に魔術師の正装をなさらない。

必要な場面でのみ義務付けられているものだからわたくしもほとんど着用はしないけれど、専属魔術師というのは、ラグト国では結構な位置付けにある。

事実、これ見よがしに着用しては職権濫用している者もいるくらいに。

その飾らない天性の紳士的な態度が、また素晴らしく素敵だと惚れ惚れした。

「部下のロイズから連絡がありました。『グレーデンの魔女』討伐隊編成を任されたと……」

ふむ……と少し考える素振りを見せたルシア様に首を傾げたなら、立ち話も何だと、中庭のベンチにエスコートされた。

「どうぞ」と先にわたくしを座らせてから、ほどよく装飾の施された猫脚の木製ベンチに、ルシア様が優雅に座る。

どこにいても様になる方なんて、ルシア様をおいてはそういないだろうとぼんやり思った。

「魔女についての記述があまりに伝説めいたものばかりで頼りないんです。ルシア様なら、詳細までいかずとも、何か知ってらっしゃるか」と

いつまでも眺めていたかったけれど、わたくしとて専属魔術師の端くれ。

成果を上げ、ルシア様に見直していただきたい。

あの裏魔術師より、わたくしの方がよっぽど魅力的だと思っていたきたい。

早々に話題を切り出したわたくしに嫌な顔一つせず、ルシア様は口を開いた。

「『あれ』は私が造ったのですよ」

『あれ』……あれ、とは——『グレーデンの魔女』のこと？

「……え……」

疑問符さえ付かない意味のない言葉が、ぼろりと、口から漏れた。

Witch of Gloden・2 sideルシア

ミレンツィアの翡翠色の瞳が困惑に揺れた。

まだ十八歳であるという彼女は、外見もさながら内面もまだまだ未熟なようだ。

少なくとも、私の言うことに関して、ありのままを受け止めるだろう。

馬鹿な女だと思った。

「冗談ですよ」

はっと我に帰ったミレンツィアの顔が、みるみる真っ赤に染まった。

「でっ……ですわよ、ね！」

「私の知っていることなど、大したことではないかもしれませんが」

それでもと粘る彼女に、それなりな情報を流してやった。

「『グレーデンの魔女』は実在します。さも言い伝えのように記述された書物が多いのは、ラグト国自体、魔女のことを公におおやけしたくなかったからでしょう」

「何故ですか？」

つぶらな瞳が純粹に疑問を浮かべる。

「理由は様々でしょうが、一番に、あの魔女は館を出ない。稀に触^{セン}手に引^{サイ}つ掛かる者もいるようですが、範囲はそう広くない」
「センサー、ですか？」

的確に伝わらなかったが、そう仕向けたのは自分なので、敢えて触れずに話を進めた。

「つまり、報告されるような実害が少なかったのです。皆無ではありませんでしたが……大抵の地元の者は、あの森には入らない。被害者がいたとしても、旅人や浮浪者でしょう。軽罪人などは処罰の一環として森に追いやられることもあったようですが」

事実、あの森自体に居を構える者はない。
管轄はパピロの町であっても、グレーデン地区は独立したものである。

『地区』とはすなわち『立ち入り禁止地区』と同義語だ。

「では何故、薬師^{やくし}の娘はわざわざそんなところに……」

ミレンツィア・ドリス——ようやく思い至った。
彼女の実家は確か、魔術具販売で財を成した一族だ。

息子が商売の縁で知り合った娘が王都専属魔術師で、結婚を機に引退したのだと耳にしたことがあった。

裕福であると、下層の生活まで想像が及ばないか。

「金がないのですよ」

「お金、ですか？」

未だ理解及ばぬ表情で、真剣に疑問を投げってくる。
考えていないのではない、思いもよらないのだ。

「あそこは辺境で森の向こうはエンデ山脈が連なり、見所が少ない。
わざわざ訪れる者もないので、もちろん、財政も厳しい者が多いの
です」

「……あ……」

途端、ようやく理解したのか、この地では珍しい真白い肌が羞恥に染まった。

「薬草が……買えないんですね……」

「名も無き森は『地区』であり、荒らされ難いぶん、そういったものは豊富なんですよ」

緩く風が吹く。

彼女のロングヘアが攫われ、表情を一瞬隠した。

「薬師の娘は……大丈夫でしょうか」

私は答えなかった。

やはりミレンツィアはまだ未熟だ。

『討伐隊編成』を言い渡された時点で、結果などわかり切っているのに。

「貴女は貴女の出来ることをなさい。そうですね——私も同行しましょう」

「えっ？」とミレンツィアの顔が弾かれたように私を見た。
翡翠色の瞳には、柔く——相変わらず噓くさい笑みを浮かべた、私が映っていた。

「さて」

ミレンツィアが自室に戻り、ようやくベンチから腰を上げる。
砂漠と荒野に囲まれたこの国の風は、相変わらず乾いていた。

私のようなだと、ふと思う。

永遠に満たされない飢え、永遠に満たされない気持ち、永遠に救われない魂——何と馬鹿らしく、下らなく、そして、素晴らしい心地であろうか。

私に『しあわせ』などは来ない。

しかし、少なくとも、永遠を感じられる程度の『それ』は手に入れた。

少なくとも、あのときの望みは手中にある。

「尻拭い程度はするべきでしょうね」

誰のためでもなく、私自身の今後のために。

ついと王城を見上げ、多忙で有名な彼の元へと足を向けた。

「久しぶりです、ディノ」

魔術師総括であるディノ・ブランゼスは書物に埋もれていた。

「……入室許可は出したらん」

ご機嫌は麗しくなさそうだ。

ちらと向けられたアッシュグレーの瞳は剣呑で、すぐまたデスクの書類に戻された。

「顔パスでしたよ」

「使い物にならん秘書だ、クビにする」

「そう仰らずに」

デスクと同じく書物が山積みとなったソファの空いた一画に腰を沈め、彼の仕事が終わるのを待つ。
大して待たずとも、ディノは自ら切りを付けたようだ。

「何の用だ。お前が僕に用など、ろくでもないことに決まっておるうがな」

「貴方の長所は慈悲深いところですよ」

それは短所と表裏一体。

いつか彼は、痛い目を見ることだろう。
それが私に関することかは知らないが。

瞳と同じ、少し白髪の混じったアッシュグレーの短髪を撫で上げながら、ディノはパイプを銜えた。
ソファの前まで来てから座る場所がないことに気付いたのか、デスク上の書物を乱雑に投げ捨てるとそこにどかっとな腰掛ける。

——ディノは壮年になるまで普通の人間だった。
持続型魔術師には珍しく、突如、眠っていた魔力が解放され魔術師

となったまさに稀有な例であり、容姿年齢はそこから止まっている。持続型のほとんどが少年から青年程度の容姿をしているので、箔が付いていいのだと本人は思っているらしいが。

「で、何だ」

「『グレーデンの魔女』討伐隊に私も同行します」

ぐと、彼の眉間に皺が刻まれた。

「哀れな生贄への罪滅ぼしか？」

哀れだと？

笑わせてくれる。

「私に人としての善悪などないことは承知でしょう」

「『ルシア』もとんだ奴に利用されたもんだ」

「口外しない貴方がすきですよ」

私は笑みを深くし、同時、彼は眉間の皺をより深くした。

——ディノは知っている。

知っていて、私を容認している。

それは単に彼の魔力が私に及ばないというだけでなく、彼自身の人

柄によるところが大きい。

ディノは知っていた——『ルシア』の苦悩を。
ディノは理解していた——『私』の欲望を。

多大な犠牲と膨大な魔力によって施行された幻術にディノが囚われなかったのは、『ルシア・アズガルド』の最期の望み。

——苦悩の解放という最上の望みを叶えてなお、友に忘れずにいて欲しいという贅沢で残酷な望みだ。

そして。

「貴方は私の良心です」

「そんなもんは自分で持つとけ」

パイプから豪快に煙を吐いたディノに笑みを浮かべてしまう私に、満足そうに、彼は笑うのだ。
笑わせてくれるな。

——笑わせてくれるな、『私』のなけなしの『良心』よ。

Witch of Gloden 2 sideルシア（後書き）

まだ続きます。

Witch of Gloden・3 sideミレンツィア

討伐隊編成の指示を受けてから僅か三日で出立を可能にした。

未だ、薬師の娘は怯え戦っていることだろうと思うと、胸が痛んで堪らなかった。

三日でも遅いくらいだと思う。

わたくしは、そんな経験はなかった。

お父様は優しかったし、お母様は厳しいながらもわたくしを愛してくださっていたのことだと知っている。

恵まれた環境を、生きていく術すべを、わたくしの両親は与えてくれていた。

薬草一つ、満足に買えない環境って何？

薬草一つのために、危険な地区に行かねばならない環境って何？

討伐隊編成のため、選抜した魔術師達の日程を無理矢理最短で捻じ込んで調整する間、ずっと考えていた。

パピロの町は確かに廃れており、薬師を営む家は一軒しかないらしい。

辺境であるパピロに街から商隊が訪れるのも稀で、もちろん、価格は法外に高価だそうだ。

しかし、パピロの薬師が法外な値段で薬を売ることにはなかったと、調書には記載されている。

いつかお父様が言っていたことを思い出した。

『パピロへの商いは儲からない』

幼少のわたくしには意味がわからず、ただ、そうなのかと思っただけだった。

そんな環境で戦ってきた娘。

想像を絶するほど過酷な状況で生きてきた娘に、これ以上の試練など、何故与えることが出来ようか！

薬師は薬草がなければ商売にならず、また、薬師によって、助けられている人々があの町には確かにいるのに。

この三日が歯痒かった。

わたくしがここで出来ることと言えば、お父様にパピロへの商隊編成願いを出すことくらいだ。

詳細を記載したので、きっと、良心的な価格で卸してくださるはず。わたくし自身、出来る限りの私財で薬草を購入したので、出立の際にはそれを届けるつもりでいる。

——そうして三日後、わたくしとロイズ、ルシア様を含めた最上級魔術師二人と専属魔術師五人、軍人十人で編成された討伐隊は、ハシルスを出発した。

「ミ、ミレンツィア様、大丈夫ですか？」
「何がですの」

終始落ち着かない様子のロイズの言葉に、額に青筋が走る。

大丈夫かですって？

なら、あの馬鹿男を黙らせて！

「おいおい、ミレンツィア嬢、大丈夫かあ？あんたにやまだ、荷が重いんじゃないの？」

無遠慮な物言いに、また、青筋が増える。

声の主は専属魔術師ゾルゲ・ヴァイヴァリー——規格外の体躯と無骨な手、大雑把で粗野な性格をしたわたくしより年上の青年だ。青年とは言え、実年齢はわからないけれど。

ゾルゲは出発してからずっと、こんな感じでことあるごとく、わたくしに絡んでくる。

今だって、そう広くない幌付きの荷台で調書を読んでいたただけと言うのに。

——失敗した。

焦るあまり、実戦経験と実力ばかりを優先させ、人柄まで考慮しなかった結果だ。

けれど、ルシア様がいる以上、売り言葉に買い言葉のような馬鹿な真似は出来ない。

わたくしはただ、黙ってやり過ごすしかなかった。

「ゾルゲ、いい加減にやめてよ」

ロイズが吃^{ども}ることなく苦言を呈す。

普段もそうやってわたくしに話せばいいのに。

逸れた思考の隅で、「けっ」と唾を吐いたゾルゲに引き戻された。

「だいたい、何でロイズ様ほどのお人がこんな女^{あま}についてやってるんですか？」

ロイズ様ほどの人？

どういうこと？

二人は知り合い？

あきらかに理解及ばずといった感じで首を傾げたわたくしに、ほら見たことかとばかり、ゾルゲは嘲笑って見せた。

「ゾルゲ」

「いいじゃねえですか。ついだから教えてやりましょうよ。この顔、わかってないって顔ですぜ」

「いいんだよ」

苦笑混じりで返したロイズに、また、青筋が一本増える。

——何、何が『いい』と？

何を知らないと言っの？

わたくしが、何を知らないと？

少なくともロイズとゾルゲはわたくしの知らない何かを知っている。
わたくしの知らないロイズの何かを。

ロイズの経歴は調べたつもりだし、特別な何かもなかった。

専属魔術師である以上、無能とまでは思わないが、わたくしの部下
として相応しいとは思っていない。

けれど、ゾルゲの言葉端には、ロイズに対する尊敬の念さえ感じら
れるのは——何故？

と、ふいにルシア様が向かいから口を開いた。

「ロイズは『ジャガーノート特殊能力者』なんですよ」

「え？」

思わず聞き返してしまったとき、わたくしは、どんな顔をしていた
のだろう。

ジャガーノート——ルシア様は、ジャガーノートと言った？

ロイズが『ジャガーノート特殊能力者』だと？

「そ、んな……調書には……」

「故意的に削除したんでしょう。誰が、とは言いませんが……まあ、
記載しない方が身のためでもある能力ですから、賢明とも言えます

がね」

「ほら！やっぱり知らなかったんですよ、こいつは！」

驚愕、と言つよりは呆然に近い。

こともなげに言つたルシア様も、騒ぎ立てるゾルゲも……ロイズがどんな表情をしているのかも、わたくしには見えなかった。

『ジャガーノート』とは今でこそ特殊能力者に当て嵌めて使われるが、その含む意味は多々存在する。^{いにしえ}

古の力、神々の力、特殊魔力、先祖返り、古代種、最強の魔力——全てが『ジャガーノート』と同義語となる。

これらは血筋など無関係に、突如として現れる能力であり、一括して言えることは『魔力を消費せずして同等の力を扱える』ことにある。

そして特徴としては、本人の持つ魔力自体の測定が不可能であると言われて——、

「……ああ」

突然に、すくと腑に落ちた。

何だ、調書にはしっかりと書いてあったというのに。

わたくしが理解していなかっただけで、ロイズは嘘を吐いていたわけではないのに。

ただ、わたくしが未熟だったただけだ。

ようやくロイズの顔を見た。

苦笑とも違う……どちらかと言えば、諦めに近いような、そんな表情を浮かべた彼は、笑っているように見えて落ち込んでいるようにも思えた。

「何で言っちゃうんですか、ルシア様……」

「君の弟子の心情を汲んだだけですよ」

ああ——ゾルゲはロイズの弟子だったのか。

ならば最初からわかりやすく『師匠』とでも呼んでいればよかったのに。

わたくしには師がないけれど、敢えて挙げるなら、それはお母様。お母様を蔑ろにされるような発言や行動があれば、わたくしだって、口の一つも挟みたくなるに違いない。

どこまでも、わたくしは未熟だったのだ。

「……ごめんなさい、ロイズ」

わたくしは貴方に相応しくなかった。

「ミ、ミレンツィアさ」

「貴方の今後は、帰ってから考えましょう」

最後まで言わせたくなかった。

これがわたくしの精一杯だった。

『ジャガーノート特殊能力者』に、わたくしの部下という立場は相応しくなどない。

やっぱり、ロイズの顔は見れなかった。

以降、パピロの町に到着するまで、時折ゾルゲが絡んでくる以外、わたくしに何かを言う者はいなかった。

いつだって結局、わたくしは自分のことばかり。

薬師の娘のことも、パピロの町のことも、ロイズのことも、ルシア様のことも。

結局何も、理解などしてはいなかったのだ。

本当の絶望が、何であるのかさえも。

Witch of Golden 3 side ミレニシア (後書き)

まだまだ終わらない番外編。

Witch of Gloden・4 sideルシア

討伐隊としてハシルスを出発して僅か三時間程度で、隊の者達がミリーをどう思っているのかが容易に理解出来た。

それはミリーが部下であるロイズをどう扱っているかに起因しており、隊の中に彼のかつての弟子ゾルゲ・ヴァイヴァリーがいたことが問題だ。

ゾルゲは粗野で大雑把だが、あれでいて人望は厚い。

それは彼が師事したロイズが出来た人物であつた故に育まれたものであり、ゾルゲ自身、きちんとそれを理解していた。

ただ暴れ回っていたゾルゲ自身を見てくれた自らの師に対する彼の心酔ぶりは半端ない。

よって、ロイズを蔑ろにするミリーを目の敵にしていた。

それは自^{おの}ずと、ゾルゲに人望を寄せる周りにも波及していく。

「あ^{あま}の女」と口にしたときは、少しばかり首を傾げたが。

中には小娘などと口にする者もいた。^{おんな}

女であることは間違いないが、女^{あま}や小娘と形容するにはミリーの出来は良過ぎる。

たかが小娘は若干十八にして専属魔術師になどなれない。

まあ、中身は小娘かもしれないが。

ミリーのロイズへの態度は彼自身が何であるかを知らない故のものだと、わかつてはいた。

——それを仕組んだのがロイズ自身だということも。

『特殊能力者』^{ジャガーノート}——いや、ロイズの能力は『最強兵器』^{ジャガーノート}と形容するに相応しいと私は思っているが、その彼がミリーの部下を希望した

のだ。

いつか、たまたまそのことを耳にした私は、彼と会話する機会があった。

「仕組んだそうですね」

「いやあ……お恥ずかしいです」

ロイズのほかに染まった頬に、懸想しているのだとすぐわかった。

人畜無害な空気を纏い、誰をも魅了する美しい顔かんばせを持ち、それでいて規格外の体躯を持つ誰もが手を焼いたゾルゲを懐柔し、『特殊能力者』トと呼ばれる彼は、若干十八歳の少女に取り入りたいがため、彼自身好まない手段を使ったのだ。

経歴を弄り、特記を削除し、自らの地位と権限でもって、部下という地位をもぎ取った。

「どなたにお聞きになったんですか？」

「デイノが笑ながら言っていました」

「あはは、笑ってらっしゃいましたか」

私は笑わなかった。

私はもう知っている。

如何にしても手に入れたいものがある、その欲求を知っている。

「おかしいことではないですよ」

「……そうでしょうか」

ロイズは穏やかで優しく、真つ直ぐな男だ。

それでも抗えない欲求に手を染めつつある自分と葛藤しているのだろつ。

ほんの僅か、伏せた白金の睫毛が同色の瞳に陰りを落とした。

「欲望に忠実なのは実に人間らしいと私は思います。それを卑下することはない。欲望に忠実な貴方の方が、私は好きです」

善意の塊のようだったロイズ。

彼が堕ちていく様を私は見てみたい。

……ロイズがロイズである以上、堕ちていくかは定かでないが、だからと言って、彼を故意的に墮落させようとまでは思わない。

「まあ、そう気にすることはないということですよ」

何故なら彼は、私の『良心^{ディノ}』の気に入りであるのだから。

それが唯一、ロイズを気に掛ける私の真意だった。

きっかり三日三晩で到着したパピロの町は騒然としており、午前十時を回ってなお薄く霧が掛かっていた。
この程度の霧であれば大した枷にはならないだろうが、取り乱した薬師を宥めるため、一行は町役場へと向かう。

「……整備が必要ですね」

役場の寂れた状態を見て、隣のミリーがぼつりと零した。

私個人の意見としては相応だと思ったが、中央都市しか知らぬ彼女にとっては衝撃だったようだ。

「こちらにどうぞ」

通された先の応接室も粗末で、隣に座ったミリーは、ただ、唇を噛み締めていた。

——結局話を聞いたところで調書とさしたる変わりもなく、泣き崩れる薬師の対処は役場の人間に任せた。

ミリーは私財で購入したという薬草を渡していたが、それに何の意味があるのか私には理解出来ない。

直に実家から商隊もやって来るからと、ミリーは皆に告げていた。

「定期的に薬草を送ろうかしら」

満足気にそう言った彼女に、私の何かが触発された。

「それでここがよくなるとでも？」
「え？」

またも理解及ばずといった顔だ。

——腹が立つ。

そんなことを思ったのはいつぶりだろうか。
もうどれほど生きているかさえ知れないのに、こんなことで、私は腹を立てているのだ。

「ルシア様？」

「貴女はそれでここが発展するとでも？私財を投入し、私事で援助し、そしてここは後にどうなる？甘えばかりが先行し、自ら行動しなくなるのが落ちです。そしてまた、噂を聞きつけた輩が貴女に纏わり付くでしょうね。最後まで面倒を見れますか？他の場所も？」

「……あ……」

「そんなものは自己満足です」

言葉が足りなかったかもしれない。
厳しく言い過ぎたかもしれない。

が、私がここまで感情に流されること自体珍しく、こんなことまで

言ってやることもまた非常に珍しい。

私自身が自己満足で生きているというのに。

「……行きましょう」

「……はい……」

特別、彼女を買っているわけではない。

ただ、傍らのロイズのミリーを見つめるその白金が、フラチナフロンド何とも言えない表情を湛えていたことが気に入らなかった。

私は『ルシア』と約束した。

『ルシア』はディノを気に入っており、ディノは私のなけなしの『良心』でもある。

私は人として欠落しているが、それでも『良心』ディノをそれなりに気に入っているのだ、そのためならば多少の役には立ってみせよう。

「ふふ、面白い」

ロイズの視線を感じたが、特に気に留めなかった。

私にも感情があるのだ。

心動かされるものが。

ラジア以外にそんなものが存在するなど——今さらになって気付くなど。

武装した軍人を先頭に、名も無き森は目前だった。

そう、尻拭いをしてやろう——私を討伐することは出来ないが、『良心^{ディノ}』が見過ごしてしまった『グレーデンの魔女』という遺物程度なら。

鬱蒼とした森は深く、中天に差し掛かろうという日光でさえ地に届くことはそうなかった。

「やたらと瘴気が満ちてるが、これで森が保ってたんだなあ」

ゾルゲの言葉に数人が同意を示す。

その程度は感知出来るのか。

あまり交流がないので、正直、如何ほどの者達かわからなかったが、それなりには出来るらしい。

軍人の作る道を歩き続けること数時間、ようやく名も無き丘とぽつんと佇む館が見えてきた。

「結局、『グレーデンの魔女』ってのは何なんですかね」

体力のあるゾルゲは今だ元気に喋り続けており、最もな疑問を口にした。

「魔術師ですよ——元はね」

「ご存知で？」

「ええ、まあ」

話すつもりはなかったが、何故だか今は気分がいい。

教えたところで大した害はないだろうし、あるようなら潰すだけだ。

「そうですね……討伐対象を知っておくのも悪くないでしょう」

「……いいのですか？」

どうやらミリーは私が全てを話さなかったのは、何らかの意図があったのことだと理解していたらしい。

そういうところは聡い女だ。

思ったより大物になるかもしれないと、ぼんやり片隅で思った。

「ええ、暇潰しにでも」

そう、全ては暇潰しに過ぎなかったのだから。

「あの館には昔、一人の魔術師がいたのです。何の研究をしていたのかは定かではありませんが、少なくとも、合成^{キメラ}獣程度の術は可能だったそうです——」

それは、遙か彼方の昔話。

Witch of Gloden 4 sideルシア（後書き）

もう少し続く番外編。

Witch of Gloden・5 sideディウス

——いつからだったか……そう、記憶にないほど遙か昔から、私は存在していた。

老いていく体、惨めになっていく容姿、醜くなっていく精神……全てが私を蝕んでいくのを日に日に実感していたことさえ昔のことのように思う。

今はただ、研究に没頭するのみだった。

私にはスポンサー援助者が付き、同時、それは次なる『私』となる者でもあった。

心が踊るとはこのことだと、彼の者と出会った時をそう記憶している。

私が生きてきた全ては彼を手に入れるためなのだと、実感し涙した瞬間でもあった。

そんなある日、私の館に誰ぞ訪ねる者がいた。

「わたし、あの……ブライト・ワルゲルツと言います」

気紛れにもてなし茶を勧めたなら、おどおとしながらも少女はそう名乗った。

研究の完成は目前で、私は浮かれていたのかもしれない。客を招き入れること自体、彼の者以外は始めてのことだった。

「何のご用で？」

唖^{しやが}れた声が耳障りだなど、そんなことを思った。

少女は裏魔術師なのだと語った。

そして、どこをどう聞きつけたのか、私がしていた研究のことも大まかに知っていた。

「ディディウス様の名は一部の『裏^{アンダーグラウンド}』では有名なんです。……前の大戦の際、あ、ある国に合成獣^{キメラ}を譲ったとか、聞いて……」

合成獣^{キメラ}など研究の副産物に過ぎなかったのだとどこぞにくれてやったことがあったが、戦に使われていたとは知らなかった。

それより、私の名が少なからず知れていることの方がタチが悪い。

ブライトと名乗った少女にはいくつかの傷痕が見受けられた。

前の大戦——そうか、その国から参加したのだな。

そこで噂を聞きつけたのだろう。

探るような視線に気づいたのか、ブライトは慌てて訂正した。

「い、一部って言っても本当に一部って言うか！あ、あの、ああもう、そうじゃなくてっ、……その、上官はもう、戦死してるので、大丈夫って言うか……」

「そのことを知っているのは貴女だけだと」

「そ、そう！です！た、たぶん……」

どれほど生きているのかは知らないが、見掛け通り、大した頭は持っていないようだった。

本来の問題はそんなことではなく、現在、私がここにいることを知っているという事実だ。

現にブライトは『私』^{ディディウス}を訪ねて来ており、ここで茶を啜っている。殺すのは簡単だが、理由を知りたいと思った。

「何故私がその『ディディウス』であると？」

そう、私はここまで一度として名乗ってはいない。思い違いだとブライトが帰って行けばそれでよし。

正直、ブライトは優秀な裏魔術師には見えなかった。

正式にどこぞで専属として雇ってもらえずに裏稼業を営んでいると言った風情がある。

宙を彷徨った視線が一回りして、何うように私に戻った。

このとき初めて、彼女の瞳が光の加減で虹彩を浮かべる珍しい紫色なのだと知った。

「じ、実はわたし……いわゆる脱走兵？みたいな奴で、して……逃げてる途中に、結界を見つけたんです……あつ、たまたまですよ！？」

「たまたま？」

「あつ、はい。あの、エンデ山脈側の西の……綻び？みたいなことを……見つけて」

しどろもどろに落ち着かない虹彩に、なるほどとようやく得心する。ブライトは私の視線など気にも留めず、つらつらと喋り続けていた。

「何でこんなところに結界？って……思ってたなら、その、デイディウス様が……結界に入ってくのが、み、見え、て……」

ついて来た、と。

あまりに行き当たりばったりなブライトに、久しぶりの溜め息が口を突いていた。

「『デイディウス』自身を見たことは？」

「え？な、ないです」

「……では、それは私が『彼』である理由にはならないですね」

全くもって問い掛けと懸け離れた話をする。

ことりとカップを置いた私に、焦るようにブライトは畳み掛けた。

「で、でもっ、あの、貴方にはあの時の合成獣キメラの魔力の欠片がついていた！……あ、ま、した……」

虹彩が鮮やかに輝く。
私の左肩を射抜くように。

「――『邪眼』持ちですか」

「あの……よくそれ言われるんですが……何のこと、ですか……？」

ブライト・ワルゲルツは、本当の無知であつた。

何故か、と問われたなら気紛れとしか言いようがない。

あれから、まるで当然のようにブライトは我が館に住み始めた。
何も言わなかった私にも非はある。

しかしながら、あり得ないほどの図太い神経をした彼女にも間違いなく非はあろう。

年の頃十七歳程度の容姿をしたブライトの癖のある猫毛の黒髪が、
ちょこまかとした身動きに合わせてふわふわと揺れる。

女は長髪を好むと聞いていたが、彼女のそれは潔いほどの短髪であつた。

一度尋ねてみたなら、金に困って売つたのだと言う。

「何でも取っておくもんですね……もしかしたら、爪も、伸ばせば売れる……とか……？」

何を馬鹿なと、思わず笑ってしまった。

そうして何度かこんなやりとりが日常に溶け込みつつあったとき、ふと気づいたのだ。

私が笑うたび、ブライトの虹彩が、光を帯びて鮮やかになることを。

——何年ほど経ったか。

私とブライトの奇妙な共同生活は、至極当然のものになっていた。

彼女が何を思考していたかは図りかねるが、私の研究の助手などもあるまでになっていた。

スポンサー

一度、援助者が訪ねて来た際、ちらとその朱い瞳が彼女を捉えたが、特に何を言うでもなく帰宅して行った。

大方、用済みとなれば斬って捨てるとでも思ったのだろう。

斬って捨てる、か。

ふと、何故今まで、それを思考しなかったのかと不思議になる。

最初は確かに考えていたはずだ。

何故、当然のように傍にいる？

何故、当然のように傍に置いている？

何故、当然のように助手をしている？

させている？

「ディディウス様あ、お茶が入りましたあ」

研究室のドアを当然のように開け、忌まわしいもので埋め尽くされた歪な空間をもとせず、ただ無邪気に、無知なままで真っ直ぐ私を捉える虹彩がにこやかに弧を描く。

「……今行きます」

邪眼に囚われてしまったか。

そんなはずは私に限ってももちろんなく、ただ、ここ数年無意識に感じていた何かに気づいてしまったのだと、ただ、困惑していた。

彼女は無知だった。

それは天性の魔性であり、故に、邪眼という特殊能力ジャガーノートを与えられたのか。

この時点では、答えは出なかった。

ある日、食料調達にブライトをパピロの町に行かせた。

特別足りていないわけではなかったが、何となく、年相応のことをさせてやりたいと思った。

彼女が言うに、容姿年齢と実年齢はそう違わないらしい。

エンデ山脈方面から回るには遠かろうと、彼女のために、わざわざ町の外れの方に結界の歪みまで作ってやったのだ。

「私としたことが、本当に珍しいこともあるものです」

一人呟いて、ふとフラスコに映った老人の顔は、確かに笑みを浮かべていた。

それからというもの、ブライトはやたらと町に行きたがった。

まともに買い物も町中見物もしたことのない彼女にとって、それはさも楽しいことだったのだろう。

あんな寂れた辺境の町に私が思うのは、その程度のことだった。

小遣いまで渡し、ただ、自己満足に浸っていた。

「デイデウス様……わ、わたし、す……」
「す？」

さらに数ヶ月経ったある晩、二人で食卓を囲っていたら、ブライトが指を擦り合わせながらもじもじと口を開いた。

「……好きな人が……出来まし、たっ！」

耳まで真っ赤に染め上げた彼女に、時が止まったのは、何故だったのか。

何をどう話したのか覚えていない。

それでも概要はしっかり理解しているのだから、もうろくしてはいないらしい。

ブライトはパピロの町でヘンゼリーと言う青年と仲良くなったらしく、顔を合わせている内に恋慕に発展したらしい。
何だったか……ああ、確か食料品店の息子だったと言っていた。
優しいだの格好いいだのと言っていた気もするが、盲目となった彼女の戯れ言だ、真偽は定かではない。

「……そうですか」

「デイ……デイディウス……様……？」

果たして彼女の邪眼には何が映っていたのか。
グラスに映った私は、ただ、昔のような笑みを浮かべていた。

「以上です」

「え？」

私の言葉に、ミリーは目を見開いてそれだけを返した。

まさに、鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔だ。

思わずくすりと笑えば、はっと我に返ったのか、「え？でも、え？
終わりですか？」と慌て出した。

「肝心なところは知らないんですかい？」

納得いかないのか、ゾルゲでさえも首を捻ったまま頭を掻いている。

「魔女そのものの容貌は知っていますよ。触手があります」

「触手？触手……あ、触手^{センサー}……！」

ようやく行き当たった答えに明るくなったミリーの表情は、直後、
急速に青ざめた。

砂漠に近いラグト国では珍しい真白い肌が、より作り物のように見える。

「で、強いんですかい？」

ゾルゲが舌舐めずりをした。

この男は専ら闘争本能が強い。

「強いでしょうね、そして大きい。『グレーデンの魔女』は、ラグト国が黙認した国そのものの闇です」

あの醜い老人が生み出し、ディノが憐れみ、情けを掛け黙認した巨大な闇の遺物。

くだらない。

ふと笑った私を見留めたらしいミリーが、一瞬、恐怖を顔に走らせたが、知らない振りをした。

館はただ、名も無き丘の上に静かに佇んでいた。

その周囲を焼くような瘴気が渦巻き、ぴりぴりと肌を刺激する。

そう、これは妄執。

あの醜い老人と、彼女自身の憎悪と思慕の成れの果て。

すでに感知はされているに違いないが、さて、かつての無知はどう出てくるのか。

『私』を嗅ぎ取って歓迎してくれるだろうか——否、いくら彼女が

無知であつたとしても、それは遙か昔の過去に違いない。
決して『私』を歓迎はしないだろう。

「間近だと肌が焼けそうですね……この瘴気じゃもう、娘は……」
「言わないでロイズ！まだ、まだわからなくてよ！」

本当はミリーも理解している。

魔力を持つ者であつてこの肌を焼かんばかりなのだ、護られてもいない一介の娘が、無事であるはずなど皆無。

「く、あ、開けます！」

魔力防御壁に護られてなお汗を滲ませた一人の軍人が、先陣を切り、扉に手を掛けた——途端、だった。

「——っ！？」

素早く扉の隙間から這い出した触手が、あっという間に彼を連れ去る。

「ひ、ぎ、ぎゃああああ……！！！！！！」

ぼき、ばき、ぽきべき、と滑稽な音がして、辺りはしんと静まり返った。

「——か、彼は!？」

走り出そうとしたミリーをロイズが咄嗟に羽交い締めにした。

「死にたいんですか!？」

「!」

ぎり、と彼女が噛み締めた唇からは、僅かに、鉄の匂いがした。

「あれが触手ですよ、初めて見ましたか？ラグト王城にはない代物ですからね」

ディノが総括となって以来、人間の尊厳を冒すような物騒な代物は全て排除された。

あの国の魔術は極めて穏やかなものだ。

このまま維持することが出来たなら、国内に至ってはそれなりに安寧が保たれるだろう。

まあ——『白き魔女』にでも目を付けられたなら話は別かもしれないが。

僅か暗闇を覗かせる扉の隙間をぼんやり眺める。

これが感慨深いという感情なのだと、遅まきに自覚した。

「ああ……」

零れ落ちた呟きに含まれた意味は何であつたか。
意味などないのかもしれない。
しかし、どちらでもいいと思つた。

「今行きますよ……ブライト」

どれほどぶりか、懐かしくも甘美な響きを伴つた名を呟いて、意思を持って、私は扉を開いた。

——触手が襲つて来ることはなく、背後から聞こえた様々な声をも無視して、懐かしくも歪な思い出を抱える『我が館』を進んで行つた。

「グウ……ウウウ……ア、アア……」

醜悪な化け物はそこにいた。

声にならぬ声を漏らし、かつて歪んだ妄執を収めていた研究室に、ところ狭しと根を張り巡らせていた。

そこらじゅうにガラス片が散らばり、かつて存在していた妄執の欠片達は跡形もなかった。

いや、正確には『グレーデンの魔女』に吸収されていた。
現に、行方不明となった娘の顔が、肢体が、本体の右側に埋め込まれている。

破れた服から覗く発展途上の乳房が上下に揺れていたが、それは娘の息のせいではない。
触手が蠢く振動でそう錯覚するだけだ。

あれでは救出は無理だろう。

慈悲の欠片もなく、ただ、そう思ったただけだった。

その他様々な生き物を飲み込んだらしい魔女の体——体と呼んではいものだろうか。

そこにただ在る物としか、私には思えない。
狼やら野犬やら、ここにあったであろう実験体やらが、そこかしこから顔を覗かせていた。

ただ、あの紫の虹彩だけは中央に鎮座しており、澱みつつも、のっそりと私のことを見据えていた。
僅かながら、ぼんやりとしたブライトの輪郭を残して。

「ずいぶんと育ちましたね、あんなに小さかったのに」

ふふ、と小さく笑えば、紫の瞳が、まるで意思を持つかのようにきよろりと動く。

意思があるだろうか。

これまでに憎悪と妄執を喰らい、肥大してまで、それを持ち得るだろうか。

私ならば気が狂う。

ブライトだとて、正気とは思わないし思えない体たらくではあるが。
たん、と軽く靴で床を叩けば、ぶわっと一気に結界が広がる。

そう――ここはかつての我が館。

我こそが真の主であり、他の者は必要ない。

永年でもって館中に張り巡らし、構築し完成させたそれは、時を経てなお、完璧に作動した。

「私と貴女の時を経た邂逅です。邪魔をされたくはないでしょう？」

大きく、声にならない醜い咆哮が、館を震撼させた。

しかし、これほどに醜悪な化け物が存在するとは。

他人事のように『グレーデンの魔女』と成り果てたブライトをしげしげと眺めた。

あの華奢だった象牙色の体は歪な幹のように膨れ上がり、幾重にも絡まったそれによって、かつてブライトの体にあった傷跡など一つとして見つけられはしない。

癖のあった黒髪はもともと短いものだったが、すっかりぶくぶくとした肢体にめり込んでしまっている。

様々なもの達と一緒にたになつてしまつた彼女は、まさに、『合成^{キメラ}獣』と呼ぶに相応しかつた。

いつか彼女が見たと言う合成^{キメラ}獣は獅子に翼を生やした代物だろうと予測出来るが、それは副産物であらうと、それなりにしなやかで美しい造形であつたと記憶している。

——あの日、湧き上がった感情は何であつたか。

ただ赦せなかつた。

私を見るたび鮮やかに輝く虹色の虹彩が、別の男に向けられることが赦せなかつた。

生かしてやった恩を、傍に置いてやった恩を、情を傾けてやった恩を、全てを裏切られたような氣になつた。

私はただ笑い、そして、彼女もまた笑つた。
赦されたように笑つたのだ。

懐かしい記憶が蘇る。

「——祝杯をあげましょう」

「祝杯、ですか？」

ちよこんと首を傾げたブライトに、年代もののラグト産の砂漠酒を勧めた。

メメント砂漠には極端にオアシスが少なく、そのオアシスの水は、水と思えぬほど爽やかな口当たりでまるやかな舌触りだと言う。その水と、希少価値の高いガジュの実を漬け込み、魔力ある酒職人によって造られたラグト産の砂漠酒は、ブライトが一生を対価にしようとして出来る代物ではなかった。

「こ、これが噂の、です、か……!？」

感動に飲まれた彼女は、疑問も抱かずにグラスを飲み干した。

先に酔ってしまえばいい。

思った通り、四杯目辺りで虚ろになった瞳が宙を彷徨い出す。

「これで最期にしましょう」

「最……後……です……かあ……」

「ええ、最期です」

グラスの中には一滴だけ、合成獣生成剤キメラが混入されていた。

懐かしい記憶だと、場違いにも感嘆の息を漏らした。

あれは『特殊能力者ジャガーノート』専用に、ブライトに出会ってから、気紛れに作ったもの。

効果を試すつもりはなかったが、こうなるとは予想だになかったのも事実である。

あれからすぐに本来の目的は達成され、ディノと共に館を出てしまった。

当時荒れていたラグト国は私の幻術を完成させるための人柱の人選に苦勞することはなく、訝しむ者、邪魔な者は掃いて捨てるほどいたのだから幸いだ。

私は『ルシア・アズガルド』。

それ以外では在り得ないし、疑惑の視線も貶めも必要ない。

「……グ、ギギ……ガ、アアアアアッ！」

獣の咆哮で我に返る。

そうか、『グレーデンの魔女』は、私が『私』として在る前の、甘美で残酷な遺物。

「私はなかなか、貴女のことを好いていたようですよ」

にこりと微笑んで指を鳴らせば、目の前には淡く輝く魔法陣が出現した。

五芒星を二重円で囲んだその中心には、私の真名が刻まれている。
館が、呼応するように震えた。

——ひゅ、と空を斬った触手を避ける。

ああ、こんな様になってなお、貴女は死にたくないと言っのだろう
か。

確か、ヘンゼリーだったか……もう遙か昔に朽ちたであろう青年を、
未だに想うのであろうか。

馬鹿らしいとは思わない。

くだらないと卑下もしない。

私はもう、その想いを知っているのだから。

「貴女はきつと……わかつていたのかもしれないね」

邪眼持ちであつたブライト。

『邪眼』とは、様々なる魔を見透かす特殊能力。
ジャガーノート

だから、私に付いた微かな合成獣の魔力片も、この森の結界の穴も
見つけることが出来た。
キメラ

今思えば、酒に忍ばせた一滴であらうと、彼女ならばわかつたはず
なのだ。

それが幸か不幸か、私の知るところではないが、結末は目前にあつ
た。

「ウ、ウウウ……デ、ディウ、ス……サ……マ……」

泣いているようにも聞こえ、哀願のようにも聞こえた彼女の声を本
当の最期に、私は私の敬意で以つて、魔法陣を発動させる。

「――我が真名は『ナウサン・ディディウス』。彼の者^かに、永久^{とわ}の安らぎを――」

遙か彼方に追いやったはずの私の真名。

それを口にすることが、彼女に対し、過去に対しての、せめてもの私の敬意。

一瞬にして砕け散った肉片が、かつての研究室を惨たらしく赤で染めた。

「――さて、結界も解除せねば。我が『良心』は、満足してくれま
すかね」

ふと、頬に伝う久方ぶりの感覚に、少しばかり、胸が締め付けられたのは何故だろうか。

Witch of Golden・6 sideルシア（後書き）

もう少しで番外編終了予定。

3 | 1 sideラジア

リザが怒った。

珍しいこともあるものだ、あたしは暢気に構えている。

手離すいい機会かもしれない。

生きて行くために必要なことは、だいたい教えた。

剣術も仕込んだし、腕は一流なのだから、高給取りの傭兵にでもなれるし、それならそれで一人で充分——あるいは誰かを伴ったとしても、やはり充分事足りるだけは稼げる。

容姿だって、それはもう見事に、あたしの予想以上に綺麗な美青年に育ったのだ。

困われることをよしとするなら、そんな生き方だってリザには可能だろう。

そう、これは確かないいい機会。

リザが親離れを——叶うことない幻想から引き離すための。

ことの発端は余りにもくだらないことだったけれど。

「ラジアちゃん、酔ってない？」

「んー」

「どっち？」

「んー気持ちいい」

多分、あたしは酔っている。

頭がふわふわして、最高に気分がいい。

今日もポーカールと麻雀でしっかり稼いだ。

最高級の宿取っちゃったし、一人部屋だし、ベッド広いし。

そんなことを考えていたら、うっかり躓いた。

「おっ？」

「あっ」

「えっ？」

一人分、声が多いなーなんて考えていて。

次の瞬間、向かいから歩いて来た人になだれ込んでいた。

その時、ばつちり唇を奪ってしまった。

「あ、すみません」

「い、いやっ、あのっ……こっこちらこそっ！」

そのままの態勢で謝った。

相手の見知らぬ彼はそれはもう動揺していて、見るからに若そうなぶん、初めてだったら悪かったななどと、どうでもいい罪悪感が少しだけ胸を掠める。

あたしは特別何とも思わず、思ったのはそれくらいだった。

が、凄じ勢いで引き剥がされる。

振り向けば、何とも言えない壮絶な笑みを浮かべたりザがあたしを抱きかかえていた。

その視線の先の見知らぬ彼が、これでもかと目を見開いていたのが……ちよつとおかしくて噴いたけれど。

そうしたなら何故か、今度はリザに睨まれた。

そうして無言でそのまま宿に運ばれ、部屋に軟禁され今に至るわけだ。

何かあたしに落ち度があつただろうか。

いや、ない。

ただ、あの時の笑顔は、とにかくすこぶるに壮絶なものだった。それだけはわかる。

煙草をふかしながら、ベッドに寝転ぶ。

そして、考えた。

今夜の部屋は別々。

幸いにも、リザは怒っているようで、あたしの部屋に来ない。

……思い当たる節はないが。

ないが、離れるいい機会ではないだろうか。

お金はリザに預けてあるので、当分、困ることはないと思う。あたしはまた賭け事なり本職なりで、稼げばいいだけの話だ。

このまま。

このまま、あたしがいなくなれば。

いつまでも、今のままでいいはずはない。

リザには限られた時間を穏やかに、緩やかに。

そう生きて欲しいと、あたしは願っている。

わざわざいつか来る避けられない別れをあたしと経験する必要はないし、それにリザが付き合う必要だってない。

——魔力を持つ者とそうでない者の別れは、それこそ壮絶なのだから。

あたしは立ち上がり、支度をするとう部屋を出た。

静かにドアを閉め、物音を立てないように歩を進める。

深夜の廊下は薄暗かった。

また躓いたりしては元も子もないので、暗視可能な魔術を目元に施行することも忘れない。

「……これ、使うのすごい久しぶりだな」

リザを拾うずいぶん前に、暗殺を請け負って以来だったかと、苦笑を滲ませた。

そんな大層な任務でも依頼でもない。

ただ、一人の青年からそつと離れるだけのことなのに。

リザの部屋の前で、一度足を止める。

起きてはいないだろう。

夜中もいいところだ。

小さく溜め息を零して、笑った。
少しだけ、寂しさが胸を掠めた。
けれど、気づかない振りは得意だ。

「……じゃあね」

呟いて、歩き出そうとしたその時。

「じゃあねって、何」

思わず目を見開いた。

——驚いた。

ドア越しに、リザの言葉が響いたのだ。

がちゃっとドアが開いたかと思うと、物凄い勢いで部屋に連れ込まれる。

何。

何で起きてるの。

腕を掴まれたまま引きずられるように、あたしはベッドに押し倒された。

「どこ行くつもりだったの」

あたしは答えない。

「どこに行くつもりだったの」

いつものリザでじゃなかった。

腕を押さえる手に、力が籠っている。

あたしは、あたしを見詰めているだろうその蒼を見ることが出来なかった。

「……置いて行くつもり、だった、の？」

そう。

「……俺を、置いて？」

そうだよ。

「……何で？」

だって。

「……何で!？」

だって。

だって——何？

あたしは、わからなくなってしまった。

「リザ、聞いて」

「聞かない、絶対に聞かない」

ぬるま湯に浸かり過ぎて。

「……リザ」

「聞かない!」

見上げた蒼が泣き出しそうで。

「……リザ」

「聞かないから!聞かない……絶対……」

「リザ」

「……絶対……いやだよ、ラジアちゃん……」

何度か呼べば、切なそうに、泣き出しそうに笑うから。

どうして泣き出しそうなのに笑うんだろう。

どうしてあたしの名前を呼んで笑うんだろう。

押し倒した腕はいつの間にかすっかり青年のもので、強く強く、あたしをベッドへ——リザへと繋ぎ止めようとする。

それがあまりにも力強いから、あまりにも、あたしを求めているようだから——あたしは、何が正しいのかが、わからなくなってしまうた。

3 | 2 s i d e リ ザ

俺の下に組み敷かれたまま、ラジアちゃんは何度も、俺の名前を呼んだ。

ラジアちゃんはわかっていない。

そんな目で、そんな顔で、俺を呼ぶことがどういふことをわかっていない。

俺が怒っている理由も、きつとわかっていないんだ。

わかって、ねえ、わかって。

伝わって、ねえ、お願いだから。

そうずっと思っていた。

なのに今は、何故かそれが逆に怖い。

—— 伝わって、結果、こういう行動に出られてしまったから。

怒っていた理由よりも、ラジアちゃんの取った行動の方が怖くて堪らなかった。

ねえ、どうして。

俺は近づけないのかな。

どうして、この距離は縮まらないのかな。

どうして、こんなことになるのかな。

そんな顔させたいわけじゃない。

違うんだ、違うんだよ。

どうして、どうしてどうしてどうしてどうして。

いつからか俺は欲張りになっていて、知らない内にラジアちゃんを困らせていたのかな。

ねえ。

「……愛してる」

ラジアちゃん。

「……愛してるんだ」

届かないとわかっていて、俺はラジアちゃんの肩に顔を埋めた。
届かないとわかっていて、ただそれを呟くしか出来ない。

伝わってしまえばこうなると知ってしまったのに、離れていこうとするのに、傍にいたいのに。

涙が出そうになる。

悲しくて、哀しくて、愛しくて。

それでも、諦めきれなくて。

「愛してる」

大好きじゃ足りない。

「愛してるよ、ラジア」

言葉だけじゃ足りない。

「……愛してる」

繋がるだけじゃ足りないんだ。

だから、お願い。

「……傍に、いさせてよ……」

置いていかないで。

きつと俺は、死んでしまうから。

「……うん」

思わず顔を上げれば、至近距離にラジアちゃんの優しい笑顔があった。

「——ラジア」

「……うん」

「……愛してる」

「……うん」

気がつけば、呼び捨てていた。

ラジアちゃんは、珍しく怒らなかった。

わかってる。

ラジアちゃんの「うん」は俺の言っていることを何となく理解しただけ。

受け止めてくれたわけでも、受け入れてくれたただけでもない。
ただ『わかった』だけ。

「……ラジア、ちゃん」

「うん？」

少し動けば睫毛が触れてしまいそんな距離で、俺はその夜色の瞳を捉える。

「……ごめんね」

「何が」

何がつて、色々。

ラジアちゃんの指が、俺の頬を撫でる。

まだ、きつと、俺の知らない何かをラジアちゃんは抱えていて。
俺の知らないところで、泣いているのかもしれない。
泣いてはいないかもしれないけれど。

それでも。

「傍にいたいんだ」

だから、囁かせて。

言葉だけでもいいから、囁かせて。

ラジアちゃんは、その綺麗な顔でただ、笑っていた。
頬を撫でていた手はいつの間にか止まっていた。

触れそうな睫毛を伏せて、そつと、口づけを交わした。

届かない想いを沢山囁けば、いつかそれは届くのかな。

傍にいたいとたくさん願えば、いつかそれは叶うのかな。

大好きだから。

大好きじゃ足りないから。

愛しい気持ちを込めて、その華奢な体を抱き締めた。

「ねえ、ラジアちゃん」

「何、まだ何かあるの」

「……したい」

瞬間、凄い勢いで吹っ飛ばされて、壁にめり込んだところで意識は途切れた。

俺、バカかもしれない。

それでもやっぱり、貴女しか見えない。

4-1 sideリザ

「待てえええっ!」

「待たないっ!」

俺達は今、全速力で逃げている。

ラジアちゃん、足速いなあ。

そんなことを思いながら、後ろを追って来る人影に目をやった。
長い黒髪のポニーテールを揺らして、灰色の瞳は怒りに歪んでいる。
ところで、何で彼女から逃げているのか、俺は全くわからない。

ここは……どこかもわからない。

ラグト国での一件であの付近にいたくなかったラジアちゃんが「
遠くに行く」と言い出して、ぼんつと飛んできた場所だ。
転移術って便利なんだな。

「知り合い?」

たぶん、そうだと思うけれど、一応聞いてみた。

ラジアちゃんは答えない。

けれど、スピードは落ちることがない。

「何したの？」

「……」

「ねえ、何したの？」

「……あんたもあいつもしつこいな」

ちらと俺を見て、ラジアちゃんは苦々しく呟いた。

「だって……」

「待あてえええつつのおおおっ！」

「あの人、何かもう取り憑かれたみたいにすごいよ」

全速力で逃げるラジアちゃんに、全速力で追いついてくる見知らぬ彼女。

前者もちろん珍しいけれど、後者の危機迫る感は特にものすごく、正直、苦笑いを通り越してこわい。

「……金を借りただけ」

相変わらず全速力で走りながら、俺は首を傾げた。
本当に珍しいこともあるものだ。

あのラジアちゃんがお金を借りるだなんて。

俺が拾われてから今まで、一度も見ることがなかった。

「利子付けて返せ！さもなくば担保を渡せ！」

「どつちも無効だよ」

言って、ラジアちゃんは指を鳴らした。

ドオ——ンッ！

後方、ちょうど俺達とその人の間に、爆発音が轟いた。

ラジアちゃんは気の長い方じゃない。

どちらかと言えば、短い方に属していると俺は思う。

永い時を生きているのに気が短いなんて。

そんなちぐはぐな所も好きだと、こんな状況で思ってしまう俺は、
やっぱり重症だ。

——とは言え。

「ラジアちゃんでも同じことするだろうに、あの人何だか不憫だね」
「……」

ラジアちゃんは答えなかった。

何とか巻いて、ここは街外れの食堂。
二階は宿屋になっている。

「あの人、大丈夫かな？」

ラジアちゃんは容赦しないから、とは言わなかったけれど。

「あれで死んだら、笑い者だね」

「あの人、魔術師なの？」

「魔力はあるけど違うよ」

煙草をぼんやりとふかすラジアちゃんを見て、首を捻った。

「魔力を持つ人って皆魔術師になるんじゃないの？」

「なる素質があるってだけ。魔術を扱うにはそれ相応の技術がないと無理だし、技術を学んでも別の職に就く場合もある」

「へえ」

ぶあつと煙を吐き出して、ラジアちゃんは「ん？」と考える素振りを見せた。

「あんだ、学校で習わなかった？」

「学校？……ああ」

昔、ラジアちゃんがお金の魅力に負けて、無理矢理俺に行かせたあれか。

「行っただけど、やる気なかったから。今覚えたよ」

「まあ、いいけど……いや、よくはないか……」

ぶつぶつ言い出したラジアちゃんのお小言が始まる前に、ご機嫌を取るつもりでアップルパイを注文する。
注文が終わって向き直ったなら、

「げ」

ラジアちゃんがあからさまに嫌そうな顔をしたのと、急に頭上から影が落ちたのは同時だった。

「よう、ラジア」

見上げれば、俺の後ろに男の人が立っていた。
人懐っこそうな笑顔を浮かべた綺麗な顔立ちのその人は、ラジアちゃんを見てから、しげしげと俺を眺める。

「へえ、これが噂の」

俺の顎を捉えてそう口にした彼は、黒い長めのショートに灰色の瞳。
……あれ？

「……さっきの人に」

似ていた。

あの人は女の人だったけれど。

「何なの、リウゼ」

「あれ？カウゼに会わなかった？」

「吹っ飛ばした」

答えたラジアちゃんを一瞥して、リウゼと呼ばれた彼は、また俺に視線を戻した。

何だろう。

どうせこういうことをされるなら、ラジアちゃんの方がいいんだけどな。

そんなことを考えて、軽く首を捻る。

「この人、誰？」

やんわりとその手を退けて、ラジアちゃんに聞いてみる。

「リウゼ・ララウ。賞金稼ぎだよ」

どこでだったかは忘れたけれど、聞いたことがあった。
俺でも知っている。

ということは、かなり有名であるということだ。

ラジアちゃんと仕事をしたときだったか……いや、学校に行っていたとき？

何度かその名を耳にした。

確か双子で、お姉さんがいるとか何とか、聞いたような。

「さっきのが、カウゼ・ララウ」

俺の心を読んだのか、ラジアちゃんが言った。
通りで似ているはず、彼女はお姉さんの方なのか。

「で、お前がリザ・レストル？」

何故か席についてラジアちゃんが注文したラスクを食べ始めながら、
リウゼは興味深そうに尋ねた。

ここにきてさっきのアップルパイが登場し、ラジアちゃんはそっち
にかぶりつきだ。

相手にするつもりは毛頭ないらしい。

視線がぶつかる。

何だろう。

何となく、敵意みたいなものを感じて、俺は僅かに顔をしかめた。

4 | 2 sideラジア

昼飯を食べ終えて外に出る。
あたしは不機嫌だった。

「……ちょっと」

「何、どうした？」

「何でついて来んの」

しかめ面でリウゼを睨みつけたが、その飄々とした笑顔が崩れることはなかった。

何だかすこぶる憎たらしい。

本当にこの双子は変わってない……昔から、という意味で。

今日はついてない。

清々しい森での散策を堪能するためにわざわざラグトから飛んできたのに、朝っぱらから珍獣^{カウゼ}にエンカウト。
巻いたと思って昼飯を堪能していれば、片割^{リウゼ}にもエンカウト。

何なんだ。

厄日か。

大体何でこんなところで……

「……ここ、どこよ」

「エルリッツ小国のリーツアイの街だけど」

……エルリッツ小国だって？
リーツアイの街だって？

当然に答えたリウゼのそれに、一瞬、フリーズした。

「迷って来たとか……なわけねえか」

「飛んでは来たけど」

「飛んで？ ああ、転移術ね」

リウゼとリザの会話にも入らない。

そう、あたしは飛んで来た。

だから若干疲れている。

疲れている上に、さっき一発食らわせたので、より疲れている。

とにかく、『知る限りで一番気分転換になりそうな森』をイメージして飛んだのだ。

転移術は訪れたことのある場所のみ移動が可能だ。

例外もあるけれど。

そして、カウゼとリウゼの住む場所は確か、エルリッツ小国南部のテテの森——リーツアイとは隣接している。

ラグト国からは二つの国と一つの荒野を挟んでおり、歩いて来たなら……どれほど掛かるかは知らないが、とにかく遠いのは確かだ。
テテの森は小さいながらも緑豊かであり、野鳥の数もずば抜けて多い。

小国と自ら名乗るだけあり、他国に侵略の意志がないことを堂々と公言している数少ない平和主義国であることも有名だ。

まあ、軍事力自体も小規模だから、そんな大それたことの実現自体が困難ではあるけれど。

あたしは大きく溜め息をついた。

「ついてきたつて、あんたの仕事の足しにはならないでしょ」

「話題変えるなよ。まさかお前、イメージだけで飛んで来たの？」

「うるさい、ついて来んな」

早くどこかへ行つて欲しい。

お前らのことはイメージに入つてない。

いつカウゼが乱入して来るか、わかったものじゃない。

気が気じゃない。

「そう言つなよ。なあ、リザ？」

何でリザ。

睨んだまま、あたしは首を捻つた。

さつきからやたらとリザに絡んでくるな。

リザは訝しげにリウゼを眺めているが……リウゼに限つて、効いているとは思えない。

「あ、カウゼには早く返済した方がいいぜ」

「いつの話よ。あんなの無効、時効」

ああだこうだと言い争っている、リザが後ろから抱きついて来た。

「……何」

「つまんない」

「は？」

あたしが楽しんでも思っのか。

ぎゅっとあたしを抱き締めて、リザは口を尖らせた。

「今日、していい？」

……捨ててきたい。

意味がわからない。

いいわけあるか。

あたしが慥然としていると、突然リウゼが笑い出した。

「俺が邪魔ってことね」

リザを捕えたその目は笑っていない気がするけれど。

「最初から邪魔だけど」

リウゼに一瞥くれて、言い放つ。

この話題になるずいぶん前から、あんた達双子は呼んでない。

「……お前、ほんとにわかってないねー」

がしがし頭を掻きながらリウゼは軽く溜め息をついた。
溜め息つきたいのは、あたしなんだけど。

「今日はしたい」

こっちはこっちで、どうしようもない。

「何なの」

「したいの」

「娼館行く?」

途端、リザの眉間に皺が寄った。

「ラジアちゃんとしたい」

埒があかない。
全くの平行線だ。

「あんたの所為」
「何で俺」

何ではわからないが、間違いなくリウゼの所為だと思う。
とにかく。

何でもいいから、リウゼはどこかへ行つて欲しい。
余計に面倒なことになる前に。
仕方がない。
少し体力を使うが、やむを得ない。

「じゃあね」
「あつ、狡いぞ！」

ぱちんと指を鳴らして、リウゼの言葉を聞く前に、あたし達は、その場から消えた。

「どこ、どこ？」

「……あー」

「まだリーツアイの街？」

「……夕飯は美味しいものが食べたかったの」

街の南部から北部に移動しただけだった。

だって……疲れてるから。

この辺は鶏のササミが美味しいね。

まだ食ってないしね。

「転移術ってのは魔力消費が激しいのよ」

「今日二回目だもんね。大丈夫？」

「あんまり」

取り敢えず道を歩いていないぶん、リウゼに探知され難いのは確かだ。

あいつは職業柄か、やたらと鼻が効くから油断は出来ないけれど、どうせすぐに転移術を使えるわけじゃないので、仕方ない。

鶏のササミで、気分転換するしかなさそうだった。

4 | 3 sideリウゼ

「あれはねえよなあ……」

どかっとソファに座って足を組む。
転移術とはね。

詠唱無しでやってのける辺りは、流石としか言いようがない。

ラジア・ゼルダ——生ける伝説として名を馳せる裏魔術師。
その二つ名は今だ現役ってことが。

「何なのよ。辛気くさいわね」

キッチンでがちゃがちゃと夕飯を作っていたカウゼが、苛々と一瞥をくれた。

「……お前ね、ラジアに逃げられたからって、俺に当たるなよ」
「はあ！？何で知ってんのよ！？てか、あーもーっ、思い出させないですよ！」

答えず煙草を銜^{くわ}える。

火を点けて、ぼんやりと揺らめく煙を眺めた。

「なあ、あいつさあ」

「は？どいつよ？」

尚もがちゃがちゃと騒々しくしながら、苛々とした声が返ってくる。
お前ね、何でそんなに一から十まで騒々しく出来るの？
弟の優しさで言わないけどね。

「リザ・レストル」

取り敢えず本題から逸れないよう簡潔に言えば、「ああ」と呟いて、
カウゼはその手を止めた。

カウゼは情報屋をしている。
で、俺は賞金稼ぎ。

双子なだけあって職种的にも相性もよく、連携して仕事出来るの
で、能率もいい。

ここも、俺達の自宅兼事務所だ。

「で？何が聞きたいの？」

止めた手を拭いて、カウゼはこちらに来ると隣に腰掛けた。
ちらりと見えたキッチンの惨状は……今は見なかったことにしよう。

「知ってるだけ」

「ふうん……」

ちらと俺を見てから、カウゼは考え込んだ。

「……確か、孤児だったわね。拾われたのは六歳のとき。あれよ、ラジアがこの間滅ぼした国。あそこで拾われたの」

噂通りなのかと少し驚いた。

大抵、噂ってのは尾^お鰭^{ひれ}がつきものだ。

何となく耳にはいたが、まさかと思っていたのもまた否めない。

ただ、カウゼが言うなら間違いない。

こいつはこうがちゃがちゃした性格している割りに、情報の正確性は非常に高い。

「……で？」

煙を一つ吐き出して、先を促した。

「拾ったのは気紛れらしいわ。あのラジアが珍しいよね。リザはやたらと懐いてるみたいよ」

「まあ、だからこそ半信半疑、面白おかしく噂になってるんだろうけど」と、カウゼは何故か、溜め息混じりに続けた。確実に今日逃げられたこと、吹っ飛ばされたことが尾を引いているが、今それはどうでもいい。

確かに珍しいのだ。

ラジアは、他人を寄せつけない。

それは俺の知る限り出会った当初からずっとで、だいぶ打ち解けて旧友と呼ばれるまでになった現在に至ってもだ。

俺達にでさえ、なのに——特に、あの朱い月の夜から。

「そうそう。リザは、ラジアに育ての親以上の感情を持つてるみたいよ」

カウゼの言葉に、知らず、表情を歪めた。

「……やっぱりな——……」

途端カウゼの眉が跳ねる。

「何よ、やっぱりって」

「今日、会ったから」

「ラジアも!？」

「あ」

しまった。

「何で言わないのよ！ちょっと！あのときの賭け金、返済するように言った！？」

カウゼが喚き立てる。

相当根に持ってるな。

ここもまた弟の優しさで、敢えて言わないが。

ぶつくさ言うカウゼを横目に、俺は煙草を捻消した。部屋へ戻ろうと腰を上げたとき、カウゼと目が合う。

「あんた、何でリザのことなんか？」

「……リザは、まだ？」

「……普通の人間らしいわ」

そうなのか。

だからあんなに、余裕がなかったのか。

「ラジアは……止めときなさいよ」

カウゼの言葉に、軽く手を振って返す。

飽くまでも『確かに聞いた』という返しであり、『理解した』というわけじゃない。

伊達に永く相方（双子）をやっているわけじゃないので、あいつもそこはわかっているはず。

「もう少しで夕飯だからね！」

「わかったよ」

俺はリビングを後にした。

しばらくして、キッチンからはいい匂いが漂ってくるのだから、常々、カウゼの腕はどうかしていると思う。

あの惨状と騒々しさから、まさかの絶品料理が製造されるのだから、世の中ってのは不思議なものだ。

それはラジアの行動然り。

「リウゼ——っ、ご飯——っ！」

「あいよ」

さて、あいつの絶品料理でもって、少しは気が紛れるだろうか。

4 | 4 sideカウゼ

「聞く耳持たずって感じね」

リウゼの背中を見送って、あたしは溜め息をついた。

リザのことを聞いてきた理由はわかる。
ずっと傍にいないのは伊達じゃない。

「あーあ」

また溜め息が出た。

永く生きていようと、あたし達は所詮、ちっぽけな人間で。
永く生きているからこそ、想いを上手く伝えることが出来ない。
躊躇う気持ちも戸惑う気持ちも、普通の人間と何ら変わりはないの
に、それを理解してくれる人間は少なく、永きを彷徨いながら、
あたし達はそれを探し続けている。

リウゼも馬鹿だな。

言っちゃえばいいのに。

姿の見えなくなった廊下を眺めて、そんなことを思った。

「無理か。そういうところ、へたれてんだよね」

呟いて、少し笑った。

呆れだったり、羨望だったり、励ましかったり、いろんなものがない交ぜになる。

リウゼの置きっぱなしにした煙草を銜えれば、火を点けた火元が、じじつと、小さく音を立てて燃えた。

魔力を持つ者は、煙草を吸う人が多い。

それは、永い時の一瞬の暇潰しに過ぎなくて、同時に、存在を思考する一瞬であり、癒しとなる瞬間でもある。

『リザは、まだ？』

何を怖れているの。

何もしくないせに。

何も出来ないくせに。

何も出来ない理由も気持ちも理解は出来るけれど、現状維持はリウゼ自身の結果に他ならない。

理解は出来ても、擁護する気はさらさらないのだ。

まだよ、あの子はまだ。

——けれど。

「……きつと」

ぼんやりとあたしは思う。

ラジアは迷っているのだろう。

本当の自分に気づいていないかもしれないけれど。

原因はラジアの鈍感さが占めている。

あたしは情報屋であって、情報収集も分析も得意だから。
何となくわかる。

直感が訴えている。

まあ、永い付き合いだしね。

吐き出した煙は、ゆらゆらと漂う。

彷徨って、消えて行く。

あたし達はこの瞬間、自分を重ねる。
そして、願わずにはいられないのだ。

誰かと共に在りたいと。

「あいつも大概モテるけど……本当、どこがいいんだか」

誰が手に入れるだろうか。

誰よりも強いと謳われ、しかし誰よりも脆くあり、朱く染まった月
が閉ざしてしまったラジア・ゼルダの心を。

ルシアは駄目だったらしいが、あいつは変態だから仕方ない。

リウゼ？

それとも、リザ・レストル？

それともまだ見ぬ誰か？

「……クラチカ」

——貴方は、誰だと思う？

懐かしく、そしてどうしても禁忌^{タブー}を思わせるその名に、昏い陰りが
差す。

貴方は何を思う？

貴方は何を望む？

貴方が思う最善は何？

貴方なら誰がいいと？

——ラジアの救いは？

「……馬鹿ね」

またもや溜め息をついて、あたしは煙草を吸った。
あたしが心配することじゃない。

決めるのは、ラジア本人だと言うのに。

永遠の夢を。

手に入れるも入れないも、ラジア次第。

難しいことでは無いはず。

例え、あたし達より永く、この世に縛られ続ける定めでも、あいつにはそれを実現するだけの術^{すべ}があるのだから。

「でも、お金は返して貰うからね」

それとこれとは話が別で、金銭面はきちんとするべきなのだ。
さて。

銜え煙草でキッチンに向かい、作り掛けの料理の仕上げに取り掛かる。

う——ん……我ながら何て言うか……いい匂いだわ。

「リウゼ——っ、ご飯——っ！」

「あいよ」

可愛い……いや、可愛くはないけれど唯一の弟が軽くへこんでいることだし、あたしの絶品料理を食わせたらさっさと寝かしつけて、明日、ラジアに会いに行こう。

「で？」

「あ？」

「美味かったでしょ？」

「まあな」

綺麗さっぱり片づけられた皿の数々に胸を張れば、食後の一服に手を伸ばしたリウゼが、訝しげながらもそう答える。

「……何で煙草を取り上げた？」

眉を寄せたリウゼの代わりに一本抜き取り、緩慢な動作でそれに火を点けた。

より眉根の皺を深くするリウゼ。

「今日はあたしが作ったの。で、あんたがすることは？」

「お前……傷心の弟に優しさはないの？」

「諦めてないくせに」

しばらく皺を引っつけたまま固まるこいつは、未だ、あたしのことをわかっていない。

どうせ、がちゃがちゃした騒々しい奴だくらいにしか思っていないに違いない。

姉として、情報屋としての観察眼を舐めてもらっちゃ困る。

まあ、現状としてキッチンは惨状の残骸で溢れ返っているわけで……間違っではないのかもしれないけれど。

何でああなるのかは、自分でもわからないので、何とも言い難いが。

「……やれってことね」
「よろしく」

ちらと残骸に視線を遣ったリウゼが、肩を落として、ついでに溜め息を零した。

「何であなるの……?」

それは誰にもわからないんだよ、リウゼ。

これから先に起こることと同じくらいに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977p/>

h.o's.O.way

2011年9月17日17時31分発行